
バカと絆と決闘者

天道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと絆と決闘者

【Nコード】

N2085V

【作者名】

天道

【あらすじ】

遊戯王5D'sとバカとテストと召喚獣のクロスオーバーです。全ての戦いが終わった遊星は赤き竜に導かれて異世界に飛ばされてしまう。

そこで、遊星は文月学園で新たな仲間たちとともにバカな学園生活を送ることになる（笑）

『バカとテストとデュエリスト!?』のクロウさんから許可をいただきました。

第1問 バカと異世界と出会い

全ての戦いが終わり、ネオドミノシティを破滅の未来から救った不動遊星は平和な時を過ごしていた。

そんなある日、D・ホイールで道を走っていると突然、右腕の『ドラゴンヘッドの痣』が輝きだし、真紅の光は遊星とD・ホイールを包み込む。

「何だ！？ くっ、うわあああああつ！！」

次の瞬間、遊星とD・ホイールはネオドミノシティから消えた。

ネオドミノシティとは異なる世界の日本にある『文月学園』。

その校庭で二人の男子生徒が歩いていた。

「さてと、忘れ物は受け取ったし……これから遊ぼうか、雄二」

「そうだな、明久。どうせなら秀吉とムッツリーニを呼ぶか？」

「さんせいー」

茶髪に少し女性に見える顔立ちをした少年『吉井明久』と赤髪に背が高く逞しい体を持つ少年『坂本雄二』がたわいのない会話をしながら、春休み中である自身が通う文月学園で忘れ物を取りに行った帰りである。

ゴゴゴゴゴ……。。

突然、空気が震えて轟音が鳴る。

「な、何！？ この文月学園を中心に世界の終焉が突然訪れるの！？」

「落ち着け、明久！ そんな事があつてたまるか！」

「そうだね、まだ僕は愛しの秀吉と結ばれていないんだから！！」

「こんな時までお前はバカだな！？」

「バカ言わないでよ、雄二ー！！」

そんな下らない言い争いをしていると空間が歪んで真紅のバイクとドライバーが現れた。

バイクが地面に数回バウンドして、それに乗ってたドライバーが転がって倒れ、気絶していた。

「ど、どうしよう、雄二ー」

「明久、取り敢えず応急処置だ！」

「了解！」

二人が行動に移そうとしたその時だった。

ダダダダダ……。

「吉井！ 坂本！ この騒ぎはまたお前達か！？」

校舎から土煙を巻き上げて無茶苦茶な速度走ってきたのは、文月学園の教師で生活指導の鬼と恐れられ、生徒から『鉄人』と言われている『西村宗一』である。

「そんな！ 違いますよ、鉄人！！」

「そんなことより、早くこいつを助けてくれ！ 鉄人！！」

「お前達は……わかった。この人は俺が保健室に運ぶ。お前達二人は職員室で待機している！！」

「ええーっ！？」

「何いーっ！？」

二人が不満の声を上げ、鉄人はドライバーを背負い、保健室まで走った。

明久と雄二は仕方なくそのまま職員室に向かった。

数十分後、保健室のベッドに横たわった遊星は意識を取り戻して目を覚ます。

「ん……ここは……？」

「目が覚めたか」

「あなたは……？」

「私は西村宗一。この文月学園の教師だ」

「文月、学園……？ デュエルアカデミアじゃないのか？」

「デュエルアカデミア？ 何だそれは？ そんな学校は聞いたことはないぞ」

鉄人の言葉に困惑する遊星だが、持ち前の冷静を生かして状況を整理する。

「まさか……異世界？」

「何だと？」

遊星は鉄人に学園長室に連れられ、文月学園学園長である『藤堂力ヲル』に会わせる。

「私は藤堂カヲルだ。さて、まずはあなたの名前を聞かせてもらおうか」

「俺は不動遊星だ」

「それじゃあ、不動。あなたのことを洗いざらい話してもらおうよ」

「わかった」

遊星はこの世界とは別の世界である『ネオ童実野シティ』と世界中に大きな影響を与えている『デュエルモンスターズ』の事を、そして『D・ホイール』と『モーメント』の事を細かく話した。

「なるほどね……色々興味深いじゃないか。不動、一つ提案があるんだが」

カヲルはニヤリと不気味な笑みを浮かべて遊星を見る。

「何だ？」

「あんたの世界の技術をちょっと私達に教えてもらおう代わりに、この文月学園に学生として通ってみないか？」

遊星にとっては予想外過ぎるカヲルの提案に耳を疑う。

「俺が……学生に？」

「嫌かい？」

「……俺は生まれてこの方学校に通ったことがないからな。どう答えればいいのか……」

遊星の言葉に鉄人とカヲルは驚いた。

「学校に、通ったことがないだど？」

「これは、私達教育者としてはますます通わせなくちゃならないね。不動、技術を提供してくれるならあらゆる面で私達は援助するよ。頼るものがないあんたにとっては悪い話じゃないはずだが」

遊星は顎に手を添えて本気で迷った。

カヲルの言う通り、頼るものがない遊星にとっては悪くない条件での話だ。

何より、今まで学校に通ったことがない遊星にとっては学生生活は憧れである。

遊星は決意を固めると、二人に向かって一つ頷いた。

「よし。それじゃあ、不動。文月学園の編入試験は明日行っよ。一日しかないけど、今日は文月学園に泊まって勉強をしたらどうだい？」

「ああ、そうさせてもらおう」

「ところで……そこで盗み聞きをしているバカ共!!」

鉄人はドアを勢い良く開けた。

「どわっ!?!」

「ぐおっ!?!」

明久と雄二が学園長室に倒れ込み、鉄人が鬼の形相をしながら二人を見下ろす。

「貴様等……どこまで話を聞いていた？」

「全部です（だ）……」

鉄人に正座をさせられた明久と雄二は正直に答えた。

「全く、お前達は……」

「西村、彼らを責めないでくれ。全ては俺が撒いた種みたいなものだからな」

遊星がフォローし、明久と雄二は少し感動した。

「不動……わかった。吉井、坂本。もう、立っていい」

鉄人の許可を貰い、明久と雄二は立ち上がる。

「あ、ありがとう！ えっと……不動君！」

「遊星でいい。その代わりに、君達の名前を覚えてくれないか？」

「わかった、僕は吉井明久。よろしくね、遊星」

「俺は坂本雄二だ。よろしく頼むぜ、遊星」

「こちらこそ。明久、雄二」

三人は挨拶と握手を交わす。

すると遊星はふと、あることを思いつく。

「西村。明久と雄二のクラスはどこだ？」

「そんな事を聞いてどうする？」

「可能なら二人と同じクラスになりたい」

「えっ!？」

「何だと？」

それを聞いた鉄人は頭に手を当てて答える。

「不動、訳を聞こう」

「二人は俺の秘密を知ってしまったんだ。だったら、同じクラスの方が良いと思っただんだ」

「なるほどな……しかし、この二人のクラスは二年Fクラスだぞ」

「「Fクラス!?!」」

鉄人の言葉に明久と雄二は驚愕する。

「Fクラス……? 西村、それはどんなクラスだ?」

「この文月学園は一年生の最後に振り分け試験と言うものを行い、成績別にクラスを振り分けるんだ。成績が優秀な生徒はAクラス。そして、学園最低のバカの生徒達の集まりがFクラスだ」

鉄人はこれで遊星が考えを改めるかと思ったが、予想は大きく外れる。

「それでも構わない。試験の成績に関わらず俺をFクラスに入れてくれ」

「……決意は固いか?」

「ああ。最低なら、そこから上へと上り詰めるだけだ」

「……わかった。不動、お前の主張を尊重する。吉井! 坂本!」

「は、はいつ!?!」

「不動の面倒はお前達が責任を持って見る、いいな!?!」

「イエッサー、鉄人!」

鉄人の命令に明久と雄二は敬礼をして返事した。

その光景に、遊星は小さく笑みを浮かべながら思う。

(どうやら、楽しい学生生活を送れそうだな……)

人生発の学生生活を遊星は今から心待ちにした。

第2問 遊星と召喚獣と絆（前書き）

テスト勉強の現実逃避でささっと言きました（笑）

今回は遊星の召喚獣の話です。

あとで設定集を投稿します。

取り敢えずの目標は、遊星以外のチーム5D・Sを全員登場させたいです。

第2問 遊星と召喚獣と絆

遊星は学園長室で鉄人とカヲルと一旦分かれ、遊星が気絶している間に明久と雄二が運んだD・ホイールの調子を見ていた。

「よし、どこも壊れてないな」

「それにしても、不思議な形をしたバイクだね」

「だな。まさに、異世界のバイクだな」

明久と雄二が興味深く見ていると、遊星はD・ホイールを雑巾で綺麗に拭きながら言う。

「今のエンジンは知り合いの企業に頼んで造ってもらったが、元々これは俺の自作だからな」

「「……………は!?!」」

明久と雄二は遊星の言葉に本気で自分の耳が可笑しくなったか疑った。

「こ、このバイク、遊星が造ったの!?!」

「ああ。設計からプログラムを造ったりな」

「遊星、聞くが得意教科は何だ!?!」

「得意教科か、そつだな……………独学だが、物理と数学と化学と英語だ

な。古典と歴史は習ったことがないから自信が無いが……」

雄二は目が一瞬輝き、悪の笑みを浮かべた。

「なるほど、遊星は理数系が得意なんだな。明久、こいつはとんでもねえ掘り出し物を手に入れたかもしれなげ」

「うん！ 遊星なら『試験召喚戦争』で活躍しそつだね！！」

「試験召喚戦争……？」

明久の口から出た聞いたことのない単語に遊星は首を傾げた。

「明久、雄二。その試験召喚戦争は一体なんだ？」

「あ、そつか。遊星は知らないんだっけ？」

「説明しても良いが、言つても半分はわかんねえだろ。明日編入試験が終わった後に鉄人が教えてくれるだろうから、取り敢えず遊星は明日に備えた方がいいんじゃないかねえか？」

雄二の提案に遊星は頷いた。

「わかった。そうさせてもらつよ」

「よし。そんじゃあ、明久。そろそろ帰ろつぜ。遊星、また明日来るからよ」

「遊星、また明日！」

「ああ、二人共。ありがとう」

遊星と明久と雄二は別れの挨拶をすると、遊星はD・ホイールを安全な場所に運び、西村が用意した部屋に向かった。

部屋の中央のテーブルには筆記用具と参考書が置かれていた。

「明日の編入試験開始時間まで既に1日切っている……今俺に出来ることをやるだけだな」

遊星はまず自分の得意な理数系の参考書をパラパラと捲り、それを全て床に置く。

「よし、この程度なら勉強しなくても出来るな。残るは……」

残る教科は現代国語、古典、日本史、世界史、現代社会、保健体育である。

「現代国語は何かなるとして、古典と歴史と現代社会が最大の鬼門だな……保健体育は微妙だが……」

遊星の住んでいるネオ童実野シティとは違う異世界なので、その世界の歴史や社会は大きく異なる。

つまり、遊星は知識ゼロの状態から日本史と世界史と現代社会を勉強することになるってしまっ。

更には、古典も学ぶ機会が全くと言って良いほどなかったのだからも知識ゼロの状態から勉強することになる。

遊星は筆記用具の中からペンを取り出し、器用にペン回しをしながら参考書を睨み付ける。

「今夜は久々の徹夜だな」

翌日のお昼過ぎ、明久と雄二は遊星の様子を見に来た。

遊星は食堂で大量の食事を食べていた。

「遊星、凄い食べるね」

「ってか、そんなに腹が減っていたのか？」

遊星はちょうど全ての食事を食べ終え、コップの水を飲み干して答える。

「昨日から飲まず食わずで徹夜をしてそのまま編入試験を受けたからな」

「「飲まず食わずで徹夜!？」」

明久と雄二は飲んだ水を吹き出しそうになった。

「それで、テストの手応えは？」

「理数系は特に問題はない。やはり古典や歴史が難しかった……」

「すげえ、集中力と体力だな……」

雄二が半分呆れたように言うと、遊星は席から立ち上がる。

「さて、そろそろ採点が終わっているはずだから学園長室へ行こう」

明久と雄二も立ち上がり、遊星と一緒に向かう。

学園長室に入ると、既にカヲルと西村が居た。

カヲルは疑いの目で遊星を見た。

「どうした……？」

「不動、あんた本当にサテライトって場所に育ったんかい？」

カヲルは成績表を遊星に渡す。

明久と雄二も隣で見る。

現代国語：B

古典：D

数学：A

物理：A

化学：A

日本史：C

世界史：C

現代社会：D

英語：A

保健体育：B

「す、凄いよ遊星！ 平均してもBクラス並みの実力じゃないか！」

「しかも宣言通り理数系は本当に得意だったとはな……理数系に関しては最強だな」

明久と雄二は遊星の成績に感心すると、西村が三人に話しかける。

「吉井、坂本。これから不動の試験召喚獣の手伝いをしてもらうぞ」

「はい！」

「了解！」

「不動、これからこの文月学園の試験召喚システムを見てもらう」

「ああ、頼む」

明久と雄二が対峙し、西村が腕を上げて言う。

「数学、承認！」

西村を中心に特殊なフィールドが展開される。

（このフィールドの感じ、スピード・ワールド2に似ているな……）

遊星がそんな事を思っていると、明久と雄二はポーズを決めて言い放つ。

「試験召喚獣……試験召喚サモン！！」

明久と雄二の前に、召喚者をデフォルトされた80センチの召喚獣が現れた。

明久の召喚獣は改造学ランに木刀を装備しており、雄二は改造制服にメリケンサックを装備している。

「これが試験召喚獣……」

遊星が目を輝かせながら興味深く観察すると、カヲルがニヤリと笑いながら言う。

「そうさ。これが私が開発した化学とオカルトと偶然で完成した『試験召喚システム』さ。試験の点数によって召喚獣の強さが直結するんだよ」

「なるほど……俺もやってもいいか？」

「ああ、もちろんさ」

遊星は右手を前に突きだして言う。

「試験召喚獣……試験召喚サモン！！」

起動キーの詠唱で遊星の召喚獣が現れた。

しかし、その召喚獣は召喚者である遊星をデフォルトした姿ではなかった。

「……ジャンク・ウォリアー？」

それは、遊星は二体のエースモンスターの片側であるジャンク・ウォリアーだった。

しかも、大きさは明久と雄二の召喚獣と同じ80センチで、デフォルトの姿になっている。

「ジャンク・ウォリアー……こんなに小さく可愛くなって……」

遊星は長年愛用しているジャンク・ウォリアーの新しい姿に思わずそんな事を口にしてしまった。

ジャンク・ウォリアーは遊星の方を向いて、下から見上げる。

《……戦士に可愛いと言っても全然嬉しくないぞ、マスター遊星》

突然、ジャンク・ウォリアーが喋った。

真っ先に驚いたのはカヲルで、明久達も驚く。

「召喚獣が喋った？ 待ちな、そんな機能を付けた覚えはないよ！

？ それに、何故召喚獣の姿が召喚者とは違うんだい！？」

《召喚獣は俺だけじゃない。マスター遊星が望めば他のウォリアーズやスターダストを呼び出せる》

「不動、あんたは一体何者だい？」

試験召喚システムが今までに無いイレギュラーな事態が発生したことに、カヲルは遊星の存在に疑問を持つ。

「何者と言われてもな……」

遊星も頭をかいて困った表情を浮かべる。

そこに西村が救済に入る。

「学園長。不動は今日の編入試験で疲れています。試験召喚システムの事はまた後日にでも」

「……わかったよ。ほら、さっさと出て行きな」

「あんまり遊星を困らせないでよ、ババア」

「それでも教育者かよ、ババア」

明久と雄二はカヲルに暴言を言い残すと、遊星を連れてさっさと学園長室から出て行く。

「黙りな、ガキ共！！」

出るときにカヲルが叫んだが、明久と雄二は完全無視した。

明久と雄二は遊星に文月学園を案内する。

そして、誰もいない屋上に着いた。

「ところで、新学期はいつからだ？」

「来週の4月7日からだよ」

「遊星、もしかして楽しみなのか？」

「ああ、人生発の学生生活だからな。それに、他の学校とは違って試験召喚獣があるからな」

《まさか、俺達がデュエル以外で戦うことになるとは思っても寄らなかつたぜ》

「「「……………ん？」「」」

遊星と明久と雄二は声のする方に視線を向けた。

遊星の特徴的な髪の上に先ほど召喚したジャンク・ウォリアーが乗っかっていた。

「フィールドが無いのに何で召喚獣がいるの!?!」

「まさか、学園長室を出る時からずっと頭に乗っかっていたのか!?!」

「そう言えば、さっきからやけに重いと思ったら……よいしょと」

遊星はジャンク・ウォリアーを頭から降ろす。

「遊星、それぐらいすぐに気付いてよ!」

「遊星って、意外に天然なのか!?!」

「まあ、それはひとまず置いておこう。ジャンク・ウォリアー、一つ聞いておきたい」

遊星は腰を下ろしてジャンク・ウォリアーと視線を合わせて尋ねた。

「他の仲間たちも……また俺と一緒に戦ってくれるか?」

《そんなの当たり前だろ、遊星》

それはジャンク・ウォリアーの声ではなかった。

遊星の周囲に無数の召喚陣が出現し、そこから80センチのデフォルト化した遊星のデッキのモンスター達が、召喚獣として現れた。

その中心には遊星が最も信頼するモンスター、スターダスト・ドラゴンがゆっくり降り立つ。

《俺達の思いは何時だって遊星と共にある。この新しい姿になっても、俺達は遊星の仲間だ》

「スターダスト・ドラゴン、みんな……」

遊星は笑みを浮かべて、そのまま召喚獣達と話した。

「雄二……」

「何だ、明久」

「もしかしたらだけど……遊星って、Fクラスの切り札になるんじゃないかな？」

「お前もそう思うか？ 遊星と召喚獣の力を最大限に活用出来たら……試験召喚戦争は必ず勝てる……」

.

第3問 新学期と級友と戦争の引き金（前書き）

テストが一つ終わりました。

そして、ドイツ語オワタ（爆）

やっと原作、試召戦争編に突入しました。

第3問 新学期と級友と戦争の引き金

4月7日、文月学園の新学期が始まる。

編入試験後、遊星はカラルが用意したマンションに住んでいた。

だが、偶然にも明久と同じマンションで暮らしており、文月学園の制服に着替え、鞆を持って部屋から出た。

遊星は明久と一緒に登校するために、明久の部屋のチャイムを鳴らす。

「明久、学園に行こう」

『うん、わかった。ちょっと待ってて!』

数分後、準備が終えた明久が部屋から出てくる。

「遊星、おはよう!」

「ああ、おはよう。それじゃあ、行こうか」

二人はマンションの駐輪場に行くと、そこには遊星のD・ホイールがあった。

盗難防止の嚴重なロックを解除し、D・ホイールからヘルメットを取り出すと、明久に渡す。

「いやー。毎朝D・ホイールで学園まで登校だなんて、何か嬉しい

よ

「高校生じゃバイクを運転出来るやつはあまり居ないらしいからな」
遊星はD・ホイールを起動させて乗り、明久がその後ろに乗る。

「明久、前にも言ったが、振り落とされないようにしっかりと捕まってる」

「うん。遊星も安全運転でお願いね」

「任せろ」

D・ホイールのアクセルを入れ、遊星と明久は文月学園へ高速で登校する。

D・ホイールであつという間に文月学園に到着すると、登校する文月学園の生徒達が注目しているが、遊星と明久はスルーする。

駐輪場にD・ホイールを置き、嚴重なロックをして校舎の玄関に向かう。

西村からクラス配属の手紙を明久に渡すが、既に知っているのに特に驚かず、二人はそのまま2年Fクラスに向かう。

Fクラスの教室に入ると、明久と遊星は目を疑った。

「うわぁ……酷いね」

「ここは、サテライトか……？」

Fクラスはもはや廃屋そのもので、足の折れた卓袱台、腐った畳、綿がほとんど入っていない座布団が置いてあった。

「遊星、僕達と同じFクラスじゃなくてもっと上のクラスが良かったんじゃない？」

「いや。俺が昔暮らしていたサテライトに良く似ているから大丈夫だ」

「そ、そう……？」

「おっ、来たな。明久、遊星！」

二人は教室に入ると、それに気づいた雄二が手招きする。

「雄二よ、この男なのか？」

「……なかなかのイケメン」

雄二の隣には見た目が美少女の少年（？）と秀囲気が少し暗めの寡黙な少年がいた。

「そうだ。遊星、この二人は俺と明久のダチだ」

「ワシは木下秀吉じゃ」

「……土屋康太」

「俺の名は不動遊星。遊星と呼んでくれ。それから……木下。一つ聞きたいことがある」

「何じゃ？」

「失礼な事を言うかもしれないが、お前は男だな？」

遊星の言葉に明久達は驚き、秀吉は目尻に涙を浮かべて遊星の手を取って握りしめる。

「遊星よ、お主はワシを男として見てくれるのか!？」

「ああ。それがどうかしたか……?」

「ワシは……ワシは嬉しいのじゃ! 皆の者はワシを男ではなく女扱いしていたのじゃ。遊星、ワシは今……最高の友と巡り会えたのじゃ!」

「大袈裟だぞ、木下。なら、俺を最高の友と認めてくれるなら、名前でも呼んでも良いか？」

「うむ! もちろんじゃ!」

美少女の姿をしている秀吉を男扱いしてくれる遊星に一気に好感度が上がった。

すると、その光景を見た明久と康太は嫉妬の眼差しを遊星に向けた。

「ずるいよ、遊星！ 会って間もないのに、僕の秀吉とそんなに仲良くして!!」

「……天然の女の子キラ……侮れない」

「お前等、何をバカな事を言ってるんだか……」

雄二は額に手を当ててため息をついた。

それから続々とFクラスのクラスメイト達が教室に入ってきて、自己紹介が始まる。

そんな中、男だらけのFクラスに1人だけ女子がいた。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です」

それは少し癖のある髪をポニーテールに纏め、強気な印象がある可愛らしい女子である。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

(それは趣味として根本的から変だぞ!?)

遊星は心の中でツツコミを入れ、隣に座っている明久は少しガタガタと震えている。

「……心配するな、明久。何かあったら助けてやる」

「た、頼むよ、遊星……下手したら三途の川に行くからさ……」

(そんなに酷いのか!?)

「ああ、任せろ。さあ、次は明久の番だ」

「う、うん……」

明久は大きく深呼吸をし、軽いジョークを織り交ぜた自己紹介をする。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

『ダアアアアーイイイイーン!!!』

Fクラスのほとんどの男子の野太い声が大合唱する。

(な、何なんだ、このノリは!?)

遊星は目をぱちくりとさせて若干引いた。

次に遊星の番が回り、前が出る。

「先日転入した不動遊星だ。俺のことは遊星と呼んでくれ。よろしく頼む」

簡単な自己紹介を終えて自分の席に戻る遊星。

すると、康太が何か作業をしており、遊星は気になって尋ねる。

「土屋、何をしているんだ？」

「……………調整」

「それは、盗聴器と小型の監視カメラだな？」

「……………っ！？ ち、違う！」

「どこのメーカーか知らないが……………俺ならそれを半分以下の大きさにして、更に精度を上げることが出来る」

遊星の言葉に康太は食らいついた。

「……………是非とも教えてほしい」

「ああ。康太がそれを何に使うかあえて聞かないが、同じメカニックとして色々話が合いそうだな」

「うん……………不動、俺も秀吉と同じで最高の友と巡り会えた気がする……………」

「そうか。康太と呼んでも良いか？」

「……………喜んで、遊星」

遊星と康太は固い握手を交わした。

それから他のクラスメイトの自己紹介が終わると、遅れてFクラス最後の1人が教室に入る。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

それは、ふわりと柔らかいピンク色の髪に、見るからに優しそうな可憐な容姿をした少女だった。

「姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします……」

瑞希は学年二位の成績を持っていて、本来ならAクラスにいけるはずだが、昨年度の振り分け試験で高熱を出してしまい、退席してしまった。

振り分け試験の途中退席は0点扱いとなり、結果、瑞希はFクラスに振り分けられてしまったのだ。

瑞希の自己紹介が終わった直後に、担任の先生が教卓を破壊してしまったので替えを取りに教室から出て行った。

すると、明久は雄二を連れて廊下に向かった。

そして、それから二人は教室に戻り、自己紹介の時間が流れる。

そして、最後にFクラスのクラス代表である雄二が前に出る。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

雄二は一拍を置いてゆっくりと告げる。

「さて、皆に一つ聞きたい」

Fクラス全員の視線が雄二に集まる。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!!!』

二年F組生徒の魂の叫び。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

『そつだそつだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！』

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友たちの反応に満足したのか、雄二は自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが」

これから戦友となる仲間たちに野性味満点の八重歯を見せ、

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

遊星はフツと小さな笑みを浮かべて思う。

(この感じ、懐かしいな……まるで、チームサティスファクションを結成した時のようだな)

思い出に浸りながら遊星はデッキを取り出す。

(俺の仲間たちよ……新しい仲間と一緒に満足しよう！)

遊星はデッキを仕舞い、雄二の次の言葉を待った。

第4問 勝算と宣戦布告と楽しみ(前書き)

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代をはらっていないかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

不動遊星の答え

『問題点……マグネシウムは空气中で加熱すると炎と強い光を発生して燃焼してとても危険である。よってマグネシウムは鍋の素材には向かない。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。不動君の回答は化学の教科書通りの模範的な素晴らしい回答ですね。

第4問 勝算と宣戦布告と楽しみ

Aクラスの宣戦布告。

それはFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えないものだった。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんてやだ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

『姫路さん僕と付き合って下さい』

(待て、今何か悲鳴に混じって告白をしなかったか？)

遊星は首を傾げながら雄二の言葉に耳を傾ける。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

雄二はそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響きわたる。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上か皆を見下ろす雄二。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗かないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

「何をしている、康太……………」

遊星が呆れた表情で康太を見ると、康太は焦りながら壇上へと歩き出した。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙する性職者だ」
ムツツリーニ

「……………！！（ブンブン）」

「ムツツリーニだと……………？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか……………？」

「だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……………」

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

遊星は席に戻ってくる康太改め、ムツツリー二を見るとため息をつく。

「……………はあ」

「っ！？ ……遊星、これ……………」

ムツツリー二は遊星に近づくと数十枚の写真を渡す。

それは文月学園の高レベルの女子の写真だった。

「康太、そんなのは俺には必要ない」

遊星はムツツリー二に写真を返す。

「心配するな。こんな事をしなくても俺達は仲間だ」

「……………ありがとう」

「ああ」

ムツツリー二は席に座ると、雄二は話の続きをする。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だっつてその力はよく知っているはずだ」

「えっ？ わ、私ですかっ？」

「ああ。内の主戦力だ。期待している」

(なるほど、Aクラス並みの実力者である彼女なら頼りになるな)
遊星は納得したように頷いた。

『そつだ。俺達には姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

『姫路さん、結婚して下さい』

(だから誰だ？ さっきから告白する奴は？)

「木下秀吉だつている」

遊星は秀吉の方を見ると、秀吉は頬を指でかいて少々恥ずかしそうにする。

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな!』

クラスの士気は確実に上がってきた。

「それに、吉井明久と不動遊星だっている」

……シン

そして一気に下がる。

(雄二、ちよつと待て。少しは空気を呼んだらどうだ!?)

遊星と隣に座っている明久は一気に下がったクラスの士気に少しオロオロする。

「そうか。知らないようなら教えてやる。明久は『観察処分者』だ。点数は低いが、召喚獣操作は学年随一だ。自分の点数の3〜4倍の相手なら互角に渡り合うことが出来る」

『あの難しい召喚獣操作が学年随一だと?』

『でも、観察処分者って、バカの代名詞じゃなかったっけ?』

(おっしやる通りです……)

ガクツとうなだれる明久の肩をポンと叩く遊星。

「そして、遊星は姫路に次ぐうちの主戦力だ。理数系に関しては本気を出せば学年……いや、文月学園最強の実力者だ」

クラスの視線が一気に遊星に向けられた。

(雄二、少し言い過ぎだ)

遊星は少し恥ずかしくなって窓へと視線を逸らした。

『ば、馬鹿な、理数系が学年を越えて文月学園最強だと?』

『姫路さんや坂本もそうだが、どうしてそんな奴がこのFクラスにいるんだ?』

「更に、遊星の召喚獣は俺達のは次元が違う。教師の召喚フィードルが無くてもいつでもどこでも召喚できるし、未知の力を秘めた召喚獣の姿は数十種類もある。攻めてよし、守ってよし、サポートを行ってよしのオールマイティーの万能型だ!!」

ここでFクラスの士気を最高潮に上げるために、雄二は大声で遊星の召喚獣の簡単な説明をする。

『何iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiいつ!?!』

Fクラスはその事実には驚愕し、廃屋の教室にヒビが入るほど大声で叫んだ。

「どうだ? このFクラスにも優れた逸材は十分に備わっているだろ? 俺達は絶対に勝てる!」

「これならいける、いけるぞ!」

「何だかやる気が沸いてきた!!」

「打倒、Aクラス!!」

雄二の狙い通り、Fクラスの士気が最高潮に高まった。

「とにかくだ。俺達の証明として、まずはDクラスを征服してみたいと思う。明久、お前にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ!」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね?」

「なら、俺も一緒に行つてやる」

渋る明久に遊星が手を挙げる。

「え？ 遊星、一緒に来てくれるの？」

「ああ。宣戦布告なら昔、飽きるほどやってきたからな」

「遊星、君は学校に通わないで何をしてきたの？」

明久の冷静な鋭いツツコミが遊星に突き刺さるが、遊星は不敵の笑みを浮かべた。

「聞きたいか？ 俺の伝説級の黒歴史を？」

「ぜひ今度、時間がある時に」

「わかった。さて、行こうか」

「うん。じゃあ、行つてきまーす」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、遊星と明久は使者らしく毅然とした態度でDクラスに向かって歩き出した。

Dクラス前に付いた遊星と明久はお互いを見ると、ゆっくり頷いた。

「行くぞ、明久」

「うん。派手に、堂々とね」

遊星はDクラスの教室のドアを派手に開けて教室に入り、名乗った。

「Fクラス、不動遊星」

「同じくFクラス、吉井明久。Dクラス代表はいるかな？」

「僕だ。Dクラス代表の平賀源二だ」

Dクラス代表の平賀源二が遊星と明久の前に出てくる。

「俺達、FクラスはDクラスに試召戦争を宣戦布告をしに来た」

「開戦のタイミングは今日の午後からだ」

威風堂々と宣戦布告を宣言する遊星と明久にDクラスの生徒一同がざわめき出す。

「俺達Fクラスは必ずお前達Dクラスに勝利する」

「僕たちをただのバカだと甘く見たら、君たちは絶対に後悔するよ」

遊星と明久は挑発すると、腹を立てたDクラスの生徒は一斉に襲いかかってきた。

遊星は明久を庇うように前に出ると、小さく言葉を紡いだ。

「サモン試獣召喚」

遊星の前に複数の召喚陣が現れ、ジャンク・ウォリアーを筆頭に召喚獣達が現れる。

突然の複数の召喚獣の出現に、Dクラスの生徒は驚愕し、二人を襲うのを止めた。

「ありがとう、みんな」

遊星は召喚獣達に礼を言うと、明久と一緒にDクラスの生徒を見渡し、最後の台詞を言う。

「俺（僕）達を満足させてくれよ」「」

呆然とするDクラスにそう言い残し、遊星は召喚獣を消して、二人はFクラスに戻った。

Fクラスに戻った遊星と明久は雄二に報告する。

「雄二、無事にDクラスに宣戦布告してきた」

「挑発もしつかりやってきたよ。時間は今日の午後に告げてきたよ」

「よくやった！ 遊星、明久！」

雄二は満足そうに頷いた。

開戦が午後からになるので、昼食をとってからFクラス最初の試召戦争が始まる。

遊星はカバンから何かを取り出して明久に渡す。

「えっ？ 遊星、これは？」

「余り物で作った弁当だ。雄二から聞いたが、明久はマトモな物を食べていないんだろ？ 腹が減っては戦は出来ないと云うからな」

「あ、ありがとう！ 遊星！」

明久は本当に嬉しそうに笑った。

「ああ。何なら毎日でも」

「よ、吉井君！！」

瑞希が大声で呼び、遊星の言葉を遮った。

「ひ、姫路さん！？ ど、どうしたの？」

憧れの瑞希に話しかけられた吉井は大慌てする。

「あ、あの……迷惑じゃなければ、吉井君のお昼、明日から私が作りましょうか……？」

「え？ いいの……？」

「は、はい！ 私ので良ければ！」

「僕は今、目の前の女神様に感謝します」

明久は嬉しすぎて手を組んで祈りを捧げた。

「め、女神様だなんて、そんな……」

そんな光景を見た遊星は微笑ましく思い、瑞希にそつと耳打ちをした。

（姫路、好きな人にいきなり手作り弁当で胃袋を掴んでアピールするなんてやるじゃないか）

（ふええっ！？ ふ、不動君！？ わ、私は吉井君の事は……）

（隠さなくてもいい。頑張れ、姫路。俺はお前達二人を応援している）

（は、はい。ありがとうございます……）

瑞希から離れ、雄二の元へ行く遊星は新たな楽しみを見つけ、これからの展開が楽しみになった。

第4問 勝算と宣戦布告と楽しみ（後書き）

今回からバカテストを入れてみましたが、どうでしょうか？

それから、遊星の召喚獣自身能力か、腕輪の能力を募集します。

理数系なら、遊星はすぐにも400点はとれると思うので。

第5問 開戦と初陣とやり過ぎな攻撃（前書き）

遂に試験召喚戦争の開幕です。

今回は遊星とジャンク・ウォリアーが大活躍です。

そして、清水美春ファンの皆さん、ごめんなさい。

第5問 開戦と初陣とやり過ぎな攻撃

昼食後、FクラスとDクラスの試召戦争が開戦した。

「遊星！ 吉井達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

美波が走って、遊星に戦況を知らせてきた。

今現在前線にいるのは明久率いる先行部隊で、そこそFクラスの間辺りに遊星がいる中堅部隊が配置されている。

本来なら遊星の部下と秀吉の部隊もいるはずだが、遊星が少しでも勝率を上げるために独断で中堅部隊全員を補給試験に向かわせた。

「島田、後少し待て。秀吉達が来るのを待つんだ。もしもの時は…俺が全力で止める」

「でも、このままじゃ……」

遊星と美波の耳に前線部隊の戦闘の様子が聞き取れる。

『さあ来い！ この負け犬が！』

『て、鉄人！？ 嫌だ！ 補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで捕虜室で特別講義だ！
終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるか
らな！』

『た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐えきれぬ気がしない
！』

『拷問？ そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わ
る頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な
生徒に仕上げてやるっ』

『お、鬼だ！ 誰か、助けっ イヤアア (ボタン、ガチャ)』

「……なるほど、戦況はよくわかった。そろそろ行くとするか」

「えっ？ アンター一人で!?」

「心配するな。準備はもう完了している」

遊星の言葉の次に、補給試験を終えてきた秀吉達中堅部隊が帰ってきた。

「すまぬ、遊星！ 少々遅れてしまった！」

「謝ることはない、秀吉。寧ろナイスタイミングだ！」

遊星は中堅部隊全員に通達する。

「中堅部隊全員に伝える！ これより前線部隊の援護に回る！ 点数の減っている仲間を極力助け、補給試験に向かわせるんだ。俺達の……Fクラスの絆の力をDクラスに見せつけるんだ!!」

『おおおおおおおおおーっ!!!』

中堅部隊全員は気合いを入れるために大声で反応する。

「総員、突撃!!!」

遊星率いる中堅部隊が一齐に前線へ向かった。

「明久!!!」

「遊星！ 助かった……もうみんなダメかと思ったよ」

部隊長として部下の何倍も召喚獣で戦った明久はかなり体力を使ったのである。

「後は任せる。中堅部隊全員は戦闘に介入し、生き残っている前線部隊のみんなを援護だ！」

『了解!!!』

中堅部隊はその場で散り、前線部隊の援護に向かう。

遊星は中堅部隊のメンバーに指示を送る。

すると、

「あつ、そこにいるのはもしや、Fクラス的美波お姉さま！ 五十嵐先生、こっちに来て下さい！」

Dクラスの一人が美波を見つけて、化学担当の五十嵐教諭を伴ってこっちやってくる

「み、美春！？ くっ、やるしかないってことね……!!」

「サモン試獣召喚！」

美波は軍服姿にサーベルを持った召喚獣を呼び出し、既に召喚した美春と戦闘開始する。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……」

「ちょっと！ いい加減ウチのことは諦めてよ！」

「嫌です！ お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ 私は普通に男が好きなの！」

「嘘です！ お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

「このわからずや！」

言い争いと召喚獣の戦いがリンクするように、戦いが激しさを増していく。

召喚獣の頭上には参考として二人の戦闘力（点数）が浮かび上がる。

『Fクラス 島田美波 VS Dクラス 清水美春
化学 53点 VS 94点』

「い、嫌あつ！ 補習室は嫌あつ！」

この点数差では美波の補習室送りは免れない。

「補習室？ ……フッフ」

楽しそうに笑いながら、美春が美波の手を引っ張る。

「ふふっ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね」

美波の絶体絶命の危機に遊星はようやく気付いた。

（マズい、島田の貞操の危機だ……）

遊星は急いで島田を助けに行く。

「島田、加勢する！」

「不動、早く助けて！　なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

「任せろ！」

「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します……」

（こんな理不尽な殺気を向けられたのは初めてだ……）

遊星は呆れながら召喚フィールドに入り、右手を前に出す。

「サモン試獣召喚！　出でよ、『ジャンク・ウォリアー』！！」

召喚陣からジャンク・ウォリアーが現れ、右拳を前に突き出す。

《さあ、暴れさせてもらっぜー！》

新しく召喚獣が現れたことで、頭上に戦闘力が表示される。

『Fクラス 不動遊星 VS Dクラス 清水美春
化学 345点 VS 94点』

「.....は？」

美春だけではなく、美波も遊星の点数に目を疑った。

「島田、お前の力を借りるぞ」

「え？」

「ジャンク・ウォリアーの特殊能力、召喚された時、フィールド上に100点以下の自軍召喚獣がいる時その点数分だけジャンク・ウォリアーの点数をアップさせる。パワー・オブ・フェローズ!!」

美波の召喚獣から光が溢れ出し、ジャンク・ウォリアーの体に吸収される。

『Fクラス 不動遊星 VS Dクラス 清水美春
化学 398点 VS 94点』

「ななな、何ですの、その点数は!? それではまるでAクラスじゃありませんか!? 何者なんです!?!」

「俺の大切な仲間を解放してもらうぞ。ジャンク・ウォリアー!!」

《よっしゃあああああああ!!》

ジャンク・ウォリアーは高くジャンプし、右拳を引いて構える。

背中のブーストが火を噴き、美春の召喚獣に向けてジャンク・ウォリアーは急降下する。

「スクラップ・フィストオオオ!!」

右拳を前に鋭く突きだすと巨大な拳のオーラが現れ、ジャンク・ウォリアーを包み込んだ。

「や、止め……キヤアアアアアアッ!!」

美春の召喚獣はジャンク・ウォリアーの拳のオーラによって紙のよ

うにぺったんこに潰された。

ドオオオオオオーン!!!!

そして、床に激突したスクラップ・フィストの一撃は床を大きく破壊し、その際に強力な衝撃波が発生し、廊下中に一陣の突風が突き抜けた。

窓がガタガタと震え、女子達はスカートを手で押さえ、男子は反射的にスカートに目が追った。

間近で突風で髪と制服がゆらゆらと大きく揺らぎ、遊星は呟いた。

「……少し……やり過ぎたか？」

「……やり過ぎだよ（よ）（じゃ）……」「」

明久と美波と秀吉が弱々しく突っ込んだ。

「不動……やり過ぎだぞ。そして清水は補習だあつ!!」

点数が無くなった美春は鉄人によって補習室に連行される。

「お、お姉さま！ 美春は諦めませんから！ このまま無事に卒業できるなんて思わないで下さいね！」

とても危険な捨て台詞を残し、美波は補習室へと連行された。

「やっ……」

遊星は大きく深呼吸をしてDクラスの生徒を見渡し、ジャンク・ウオリアーが遊星の肩に乗る。

ビクッ!?

Dクラスの生徒は一瞬体が震えた。

「戦死者になりたい奴、勇気のある奴は俺の前に出てこい！ 全部俺が相手をしてやる!!」

《次に俺の拳に潰されたい奴は何奴だ!？》

この状況で最大にして最強と言える挑発を含んだ遊星とジャンク・ウオリアーの脅しにDクラスの生徒は戦慄した。

「む、無理だ！ あんな奴に勝てるわけ無い！」

「本当にFクラスなのか!？」

「い、嫌だ……補習室に行きたくない!!」

余りにも恐ろしくなり、この場にいたDクラスの半分以上が教室へと撤退した。

遊星と明久はこのタイミングを逃さなかった。

「Fクラスのみんな！ この試召戦争、勝機は俺達の手の中にある！」

「よおし！ 前線部隊、中堅部隊のみんな！ Dクラス代表に向か

第6問 勝利と弁当と再会(前書き)

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

- ☐ (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- ☐ (2) 悪いことがあった以上に悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の答え

- ☐ (1) 弘法も筆の誤り
- ☐ (2) 泣きっ面に蜂

不動遊星の答え

- ☐ (1) 河童の川流れ
- ☐ (2) 踏んだり蹴ったり

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『猿も木から落ちる』、(2)なら『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

ジャンク・ウオリアーの答え

『(1) プレイミス(俺のマスターはまず有り得ない)』

『(2) モンスター総攻撃による相手ライフポイントのオーバーキル』

教師のコメント

ことわざに関係ない専門用語を書かないで下さ 　　って、あなたは

一体誰ですか！？

第6問 勝利と弁当と再会

遊星とジャンク・ウォリアーの活躍により、Dクラスの半分以上がFクラスに恐れをなして、Fクラスの一方的な殲滅戦が始まった。

次々とDクラスの生徒を恐怖の補習室へ送り、戦力差が広がっていく。

それに便乗した雄二の本隊も戦地へと乗り出した。

そして、FクラスとDクラスの試召戦争の終戦の決め手となったのは、Fクラスの『切り札』ワールドカード、瑞希の召喚獣の一撃で平賀の召喚獣を葬った。

大勝利を飾った最初の試召戦争が終わり、Fクラスは喜びに満ちあふれていた。

今回の功労者である遊星と明久をFクラスのみんなは褒め称えた。

遊星は小さく笑い、明久は戸惑いながらも笑って応えた。

そして、雄二は平賀と戦後処理の話をし、設備交換は行わずに、雄二はDクラスにBクラスの破壊を要求し、平賀はその要求を呑んだ。

「それにしてもさ」

「ん？」

「Dクラスとの勝負って本当に必要だったの？ 別にエアコンくらいなら他の方法で壊せたと思うけど」

「それは俺も思った。雄二、お前の考えを俺達に聞かせてくれ」

「ああ、そのことか」

帰り道。

遊星（D・ホイールを押ししている）と明久は一緒に下校している雄二に疑問をぶつける。

「理由は他にもある。クラスの皆を試召戦争に慣れさせる為だとか、他のクラスにプレッシャーを与える為だとか、自信をつけて士気を上げる為だとか」

「ふーん。それじゃ、Dクラスの設備を手に入れなかったのは？」

「俺達の目標はあくまでAクラスだからな。Dクラスの設備を手に入れることで一部の奴らが満足して試召戦争に反対し始めるかもしれないだろ？ そうならない為と、不満によるモチベーションを維持する為だ」

かつて『神童』とまで呼ばれた雄二の深い考えに遊星と明久は何度も頷いて納得した。

すると、遊星は試召戦争を通してあることを思いついた。

「雄二。一つ聞きたいが、試召戦争中は携帯電話の使用は不可だかな？」

「ああ。そんなことをしたらすぐに教師に没収だぞ」

「だったら、俺に一つアイデアがあるんだが、聞いてくれるか？」

「ん？ 何々？」

「言ってみる」

明久と雄二は遊星のアイデアの説明を聞いた。

「なるほどね……」

「そいつは確かに使えるな……」

数分かけて説明したそのアイデアに明久は少し驚き、雄二は悪の笑みを浮かべる。

「康太に頼んでBクラス戦までには部隊長と代表の雄二の人数分を造ろつと思つ」

「了解。頼んだぜ、遊星！」

「これでBクラスの試召戦争も少しは有利になるね！」

遊星は頷き、携帯電話を取り出してムッツリーニと連絡する。

その夜、明久は遊星に理数系の勉強を教えてもらっていた。

試召戦争で少しでも召喚獣の戦闘力を上げるために明久が遊星に頼んだのだ。

遊星は隣で黙々と制作しており、明久が分からない時に遊星は作業を中断して細かく教える。

二人は休憩時間には入ると、明久はふと気になることを遊星に聞く。

「あ、遊星。勉強とは関係ないんだけど、一つ聞きたいことがあるんだ」

「何だ？」

「うん、よかったら、遊星の召喚獣を出してくれるかな？」

「召喚獣を？ わかった、サモン試獣召喚！」

遊星はジャンク・ウォリアーを召喚する。

《ん？ マスター、どうしたんだ？》

「ちょっと失礼しますね」

明久はジャンク・ウォリアーの体を触る。

《な、何だ？》

「僕が今ジャンク・ウォリアーに触っている所で、遊星の体で何か感じない？」

「……微かだが、明久がジャンク・ウォリアーに触れている場所に何かに触れられている感触が……」

「やっぱり……」

ジャンク・ウォリアーに触れたことと遊星からの証言により、明久は確信を得る。

「遊星の召喚獣は僕と同じ『物理干渉能力』があるね」

「物理干渉能力？」

「召喚獣は原理は全くよくわからないけど、仮想立体映像で触れることができないんだけど、『観察処分者』の僕と教師の召喚獣は実際に召喚獣に触れることが出来て、召喚獣が受けるダメージがフィールドバツクするんだよ」

「なるほどな……だからDクラス戦の時に床が破壊されて突風が吹いたのか」

「だけど、フィードバックの痛みは結構体に響くよ？ 召喚獣の点数が減っていくと、体に疲労が伝わるし……学園長に相談したらどうかな？」

明久は心配して遊星に提案するが、遊星は首を左右に振った。

「その必要はない」

「え？ どうして？」

「共に戦っているモンスター達と一緒に痛みを共有する……デューエリストとして俺はそれを嬉しく思うからな」

《ははっ、マスターらしいな》

「へえー、遊星は凄いな。僕はフィードバックの痛みが怖いからね……」

「まあ、それが普通の反応だろ。さあ、次の試召戦争の為にもう一頑張りしよう。明久の愛する姫路の為に」

遊星は意地悪な笑みを浮かべて爆弾を投下する。

「ゆゆゆ、遊星！？ 僕が姫路さんを愛してるって、そんな訳無いじゃないか……！」

激しい動揺を見せる明久に遊星は更に攻める。

「隠さなくてもいい。雄二から聞いたぞ。明久が試召戦争を始めようと思ったきっかけは愛する姫路の為だってな」

「雄二、後で絶対に殺す！！！」

（明久も姫路も既に相思相愛だったとはな。全く、明日のお昼が楽しみじゃないか……）

遊星は微笑みながら明日に雄二を抹殺しようと考えている明久を見る。

翌日の昼。

四教科のテストが終わり、お昼休みに明久達は瑞希が作ってきた手作り弁当を屋上で食べることになった。

しかし、遊星は学園長のカラルに少し話があり、現在学園長室にいる。

10分弱の話が終わると、遊星は駆け足で屋上に向かった。

「すまない、待たせ　何だ、これは？」

そこには顔から生気が失った明久が倒れており、姫路が体を揺すっている。

「吉井君！　大丈夫ですか！？」

「だ、大丈夫だよ……ちょっと一気に食べ過ぎて苦しいだけだから……」

(……何かが変だ……)

「」「遊星……」「」

明久と瑞希からかなり離れた場所に雄二と秀吉とムツツリーニが恐怖で顔を染めながら体が震えていた。

「みんな、何があつた？」

「姫路の料理の所為だ……」

「何？　姫路の料理？」

遊星は弁当箱に視線を向ける。

「見るからに美味しそうだが……」

「あれは最早人を殺せる程ヤバイ代物だ……明久が無理をして口の中に放り込んだんだ……アイツは勇者だ。姫路の為に美味いって嘘

を言つてな……」

「そんなに酷いのか？」

「なら、食べてくればいい……一瞬地獄を味わうがな……」

雄二にそう言われながらも遊星は凄く気になってしまい、瑞希の弁当箱に手を伸ばした。

「姫路、一つ頂いて良いか？」

「え？ あ、不動君？ はい、どうぞ」

「頂きます」

遊星は素手で卵焼きを取り、そのまま口に入れた。

パク……………パタリ。

遊星はゆっくりと音を余り立てずにその場に倒れ、意識を完全に失った。

「ここは……どこだ？」

気がつくと、遊星は暖かく白い光が広がる不思議な空間にいた。

「ふふふっ……まだ、あなたはここに来ちゃダメよ……」

突然、遊星の耳に高い声が届いた。

その声音はとても優しく、遊星の耳に心地よく響く。

「誰だ？」

遊星は声がする方を振り向いた。

そこには、一人の女性がいた。

濃い茶色をした綺麗な髪と透き通る白い肌を持ち、優しそうな容貌が魅力的だった。

白いワンピースを着ていて、清楚なイメージと合っていた。

「あなたは……誰ですか……？」

遊星はその女性が誰だかわからなかった。

今まで会ったことのない女性だからである。

しかし、

（何だ……この心がどうしようもないくらい熱くなるこの気持ちは

……?)

遊星は心臓を手で抑えながら女性の返事を待つ。

「ふふふつ、わからない？ まあ、そうよね……最後にあなたと会ったのは赤ちゃんの時だったからね」

「……え？」

「顔の感じもその髪型もあのソツクリね……遊星」

「どうして、俺の名前を……？」

「あらあら。まだ分からないの？」

女性は優しい笑顔を遊星に見せる。

遊星はその笑顔に見覚えがあった。

しかし、それはまるで自分の笑顔を鏡で見ているようだった。

「まさか……」

遊星は手を握りしめ、口を小さく開けて言った。

「母さん……？」

その女性は目に涙を浮かべ、ゆっくりと頷いた。

「そう……私はあなたのお母さん。ずっと、ずっと会いたかったわ
……遊星」

それは、20年の時を越えた息子と母の再会だった。

第6問 勝利と弁当と再会（後書き）

まさかの急展開！？

瑞希の料理は殺人的なので遊星をちよつと天国に逝かせました（笑）

キャラは私の想像や同人誌から考えました。

第7問 母と説教と結束(前書き)

遊戯王ゼアルの新情報のCNo.39 希望皇ホープレイとデュエ
リストボックス2012、楽しみです！

第7問 母と説教と結束

遊星は20年の時を越えて、自分が赤子の時に亡くなった母と再会した。

「母、さん……」

遊星は一歩一歩とゆっくり近づいた。

母も遊星に近づき、二人の距離が近くなり、母は両腕で遊星を優しく抱きしめた。

「こんなに大きくなって……私の遊星……」

「母さん……」

遊星は目頭に涙が浮かび、母を強く抱きしめた。

それから二人はその場に座って話をする。

「遊星……あなたのことはずっと側で見守っていたわ……」

「ずっと……?」

「ええ。ゼロ・リバーズで私が死んだあの時からあなたの守護霊としてね……」

「母さん……」

「遊星、あなたには謝らなければならないわ……あなたには辛い戦いの運命を背負わせてしまったから……」

母は遊星に頭を下げて謝ろうとするが、遊星は母の両肩に手を置いてそれを阻止する。

「止めてくれ、母さんが謝る必要はない」

「遊星……」

「確かに、今まで辛い戦いは何度もあった。だけど、俺は母さんを……父さんの事を絶対に恨んではない!」

遊星の思いに、母は淡く微笑んだ。

「……そう言ってくれて、私もお父さんも心が救われるわ……」

この時、母の心に永きに渡って重くのし掛かる枷が少し外れたのだった。

「母さん、せつかくこうして話が出るんだから、もう少し楽しい話をしないか?」

「ええ、そうね。それじゃあ……十六夜アキさんの話をしましょうか」

「えっ!? ア、アキの??」

遊星の顔は一気に朱色に染まった。

母はクスクスと笑いながら話をする。

「最初に見た時は凄く恐かったけど、遊星は諦めずに何度も正面からぶつかっただお陰でアキさんのハートを鷲掴みにするなんて、お父さんそっくりよ」

「お、俺は、ただ、アキを助けたくて……」

「でも、あなたにとっては初めて心が惹かれた女の子でしょ？ お母さんにはお見通しよ」

「くっ……」

(ダメだ……マーサと同じでやはり母という存在には勝てない……)

遊星は目の前にいる母には一生勝てないと悟った。

「アキさんが遊星のお嫁さんに来てくれたらお母さん安心なんだけどなー?」

「よよよ、嫁え!?!」

「あんなに可愛くて、私よりスタイルの良い女の子はそうそう居ないわ。遊星、誰かに取られる前に自分だけのモノにしちゃいなさい」
ピシッと指を指して命令する母に遊星は慌てふためく。

「ま、待ってくれ、母さん!」

「もう、遊星ったら意外に奥手なのね。お父さんとは大違いね」

「そう言う問題なのか……?」

「そう言う問題です!」

「ははっ……母さんは少し厳しいな」

それから二人は今までの失われた時間を取り戻すかのように話をした。

そして、遂に終わりの時間が訪れる。

「遊星、そろそろ時間だわ……神様がくれた奇跡も終わりよ」

母は悲しい顔をしなかった。

「母さん……行ってしまうのか?」

遊星が不安そうに聞くが、母は首を横に振った。

「いいえ。私はあなたの側にいるわ」

そう言うと、母の体が光となって消えていく。

「母さん!?!」

「遊星、あなたに最後の言葉を残すわ……」

母は消えゆく体でもう一度遊星を抱きしめる。

「愛しているわ、遊星……」

「母さん……俺もだ……」

遊星も抱きしめると、母は光となって完全に消え、そのまま遊星の中に入った。

「遊星! 遊星!?!」

「おい、遊星!」

「しっかりするのじゃ、遊星!」

「……………遊星！」

明久と雄二と秀吉とムツツリー二の必死の呼びかけに遊星は意識を取り戻す。

「みんな……………？」

ムクツツと起き上がり、顔を見渡す。

「どれぐらい……………意識を失っていた？」

「えっと、10分くらいかな？」

明久は遊星より早く瑞樹の死の弁当から復活していた。

「遊星はどこに逝っていたんだ？」

雄二が恐る恐る尋ねると、遊星は満足そうに頷いた。

「俺が赤ん坊の時に事故で亡くなった母さんの魂と会ってきたよ」

「え、ええっ!？」

「ま、マジかよ……………」

「遊星が亡くなった母上との再会を……………」

「……………泣ける話」

明久達は少し悲しそうな表情を見せ、遊星は関節を鳴らしながら立

「少し料理について語り合おう……」

「こ、怖いです!?!?」

「明久をこれ以上殺したくなかったらちゃんと聞きなさい」

「えっ? えっ? あ、はい!」

二人は正座をし、遊星は瑞希から弁当に何を使ったか聞き出した。

恐ろしいことに瑞希は何と、化学で使う劇薬を料理に使用したと言うことで遊星は瑞希に数分間説教をした。

そして、二度とその間違った考え方を起こさないように遊星が瑞希に料理を教えることになり、ひとまず瑞希の殺人料理が出るのがなくなるのだった。

ちなみに、美波は明久達の懸命の蘇生処置で生き返った。

そして、お昼休みを終えると、遊星と明久は次の試召戦争のターゲットであるBクラスに宣戦布告した。

Dクラスと同じく遊星と明久に襲いかかってきたが、遊星は再び召喚獣を出して返り討ちにし、無事にFクラスに戻ってきた。

「雄二、例の物だが完成したぞ」

「そうか。明久、秀吉、ムッツリーニ、姫路、美波、来てくれ」

雄二は明久達を招集する。

「明日の試召戦争に向けて、みんなにこれを渡しておく」

遊星が取り出したのは超小型のイヤホンマイク式の通信機である。

「これで常に離れているみんなと連絡が取れる。範囲は文月学園全体をカバーできる」

遊星が昨日言っていたアイデアはこれである。

「おおっ！ 昨日遊星が作っていたのはこれだったんだ！」

「まるでSF映画に登場しそうな通信機じゃな！」

「……超小型でこれだけの性能……凄い」

「これでいつでもみんなと連絡が取れますね」

「なるほどね、これで誰かを連絡係にしなくても済むわけね」

「そう言うだった。遊星、こんな物を1日で作るなんてやっぱりすごいな」

みんなは遊星を褒め称え、遊星本人は少し頬を赤くした。

「止してくれ。昔から何かを造るのが好きただけだ。みんな、明日のBクラス戦……頑張ろう！」

「うん！」

「おう！」

「うむ！」

「了解！」

「はい！」

「ええ！」

明久、雄二、秀吉、ムッツリーニ、瑞希、美波は返事をし、遊星を中心に結束を固め、明日のBクラス戦に臨んだ。

第8問 噂と異名と二重召喚(前書き)

今回は若干遊星が壊れます(笑)

やっぱりチートを使ってしまうですね。

第8問 噂と異名と二重召喚

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストで、ついさっき全科目のテストが終わって昼食を取ったところである。

「午後のBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

(殺すのか……?)

遊星は苦笑いを浮かべ、昼休み終了のベルが鳴り響くとともに遊星は明久達と共にBクラスに向けて走り出す。

今回の試召戦争の主戦力は遊星と瑞希である。

今回立ち会う教師は理数系ばかりなので、理数系最強の遊星が存分にその力を振るえることが出来る。

瑞希は言わずもがな、学年二位の強さを誇るので、どの教科もトッブクラスの実力がある。

「姫路、まずは俺達二人で圧倒的な力を見せて相手の気を削るんだ」

「は、はい！」

そこにBクラスの二人が教師を引き連れてやってくる。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「律子、私も手伝う！」

「姫路、手伝うぞ」

「わかりました！」

召喚フィールドの後に、四人は魔法陣を展開する。

「「「試獣^{サモン}召喚！」「」」

瑞希達はおなじみの召喚者をデフォルトした召喚獣が現れ、一拍遅れて遊星が召喚する。

「試獣^{サモン}召喚！ 燃え上がれ、『ニトロ・ウォリアー』！！」

強靱な肉体を持つ緑色の悪魔の姿をした戦士が現れ、三人は驚く。

「それが不動君の召喚獣ですか？」

瑞希がいつものように遊星の名字を言うと、Bクラスの二人は驚きに顔を歪めた。

「不動！？ もしかして……Fクラスの『あの』不動遊星なの！？」

「『あの？』」

遊星と瑞希だけではなく、近くにいた明久も首を傾げた。

「この前のDクラスの試召戦争の時、モンスターの姿をした召喚獣と共に『鬼神』の如く戦場を駆け抜け、次々とDクラスを補習送りにして……」

「その反面、守護神の『不動明王』の如く仲間を守り、付いた異名は『鬼神の不動明王』！！ その蟹みtainな髪と左頬の特徴的な刺青……間違いないわ！！」

本人の知らないところで何時の間にか恐ろしい異名を付けられ、遊星はガクツとうなだれる。

「文月学園で一体俺はどんな噂が流れているんだ……」

「遊星！ しっかりして！ と、とりあえず姫路さんは戦いに集中して……！」

「は、はい！」

四体の召喚獣の上に戦闘力が表示される。

『Fクラス 不動遊星&姫路瑞希 VS Bクラス 岩下律子&菊入真由美』

数学 467点&412点 VS 189点&151点』

点数の差が圧倒的過ぎた。

「な、何よこの点数は!？」

「姫路瑞希さんとはもかく、不動遊星のこの点数は……やっぱり噂は本当だったのね!？」

「俺はもう化け物扱いか……フッフ……良いだろう……」

遊星は何か振り切れたように立ち上がる。

「噂のように鬼神らしく敵を倒し、守護神らしく仲間を守ってやる!!! 行くぞ、ニトロ・ウォリアー!!!」

遊星の気合いの入った声に反応したニトロ・ウォリアーは雄叫びを上げる。

《ウォオオオオオオオオオオオオッ!!! それでこそ俺達のマスタ―だ!!!》

「不動くん。じゃ、いきますね」

「ああ」

瑞希は召喚獣の左手を敵の方に向けた。

「ちょっと待ってよ!？」

「律子! とにかく避けなと!」

大げさなくらい横に飛ぶ二人の召喚獣。

その直後、瑞希の召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ！

「きゃあああーっ！」

「り、律子！」

左腕から光線が迸り、逃げ遅れた召喚獣の一体が炎に包まれる。

これは、テストの点が単科目400点以上の生徒の召喚獣には『腕輪』が与えられ、点数を消費することで腕輪に対応した特殊能力を使用することができる。

しかし、遊星の召喚獣には腕輪が装着されることはない。

何故なら……。

「ニトロ・ウォリアーの特殊能力、自軍の召喚獣が腕輪を使用したとき、一度だけ点数を上昇させる！」

召喚獣それぞれが腕輪無しでも特殊能力を備えているからである。

『Fクラス 不動遊星

数学 567点』

点数に100点加算され、既にAクラスを越えた戦闘力となる。

「う、嘘でしょう!？」

「悪いな。恨みはないが、オーバーキルをさせてもらう！ ニトロ・ウオリアー！！！」

ニトロ・ウオリアーの背中ブースターが噴射され、加速しながら両腕を前に突き出す。

「ダイナマイト・ナツクル！！！」

ニトロ・ウオリアーの拳が召喚獣に触れた瞬間、爆撃が起き、召喚獣は爆砕された。

「いやあああーっ！！！」

決着が付き、二人はすぐに鉄人に補習室へ連れて行かれた。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ！ そんな馬鹿な！？」

「不動遊星と姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスの残り八人に驚愕の表情が浮かぶ。

「姫路、下がれ。後は俺達がやる」

「あ、はい」

特殊能力は威力の分だけ消耗が激しいので、瑞希には下がって貰う。

「さあ、後は俺達の仕事だ！ 姫路が頑張った分敵を叩きのめすぞ
！」

『おおおおーっ！！！！』

遊星は部下の士気を高めてBクラスの前線部隊を叩きに行く。

すると、遊星の通信機に連絡が入る。

『こちら秀吉。遊星、すまないが今から明久と一緒に本陣に戻る』

「何かあったのか？」

『念の為にじゃ。何せ、Bクラスの代表が根本だからの』

「根本？」

『評判の悪い奴じゃ。目的の為なら手段を選ばない奴らしい』

「わかった。ここは俺達に任せろ」

『うむー！』

秀吉は明久と何人かを連れて教室に引き返した。

それから遊星は部下と共に異名の『鬼神の不動明王』のように敵を次々と倒した。

しかし、状況が一変してしまつ。

「きゃあああつー！」

「っ！？ 島田！？」

残り二人と言うところで美波は召喚獣と共に捕らえられた。

「そこで止まれ！ それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

「島田さん！」

そこに教室に行った明久が戻ってきた。

遊星と明久は通信機で話す。

『ど、どうする、遊星！』

『ここは俺に任せろ』

『何か策はあるの？』

『ああ』

遊星は前に出る。

「俺が島田の代わりに補習室に行く。だから、俺の戦死者になつたら島田を解放しろ」

「遊星！？」

「ま、待ちなさいよ！ だったら私が戦死した方が……」

「試獣^{サモン}召喚！ 現れよ、『ジャンク・ガードナー』！！」

両腕に巨大な楯を装着した戦士が現れる。

『Fクラス 不動遊星 VS Bクラス 鈴木二郎&吉田卓夫
英語W 310点 VS 33点&18点』

「さあ、早くやれ」

「良いだろう。鈴木やれ！」

「わかった！」

召喚獣がジャンク・ガードナーに襲いかかる。

遊星はニツと笑う。

「ジャンク・ガードナーの効果！ 召喚獣一体を強制的に防御体勢にする！ チェンジ・ガード……！！」

ジャンク・ガードナーが両腕のガードナー・シールドを一つに合体させると、美波を捕らえていた召喚獣が強制的に防御の体勢を取り、美波の召喚獣は解放された。

「なっ!?!」

「今だ、島田!」

「了解! はあっ!?!」

美波はサーベルを召喚獣に突き刺し、戦死させる。

(今だ!)

「ジャンク・ガードナーの点数を二分し、発動する! 一二重召喚!
!」
デュアルサモン

ジャンク・ガードナーの隣に新たな召喚陣が現れる。

「出でよ、『ジャンク・ウォリアー』!」

ジャンク・ウォリアーが現れると同時に右拳を前に突き出す。

「スクラップ・フィスト!」

ジャンク・ウォリアーの攻撃より、最後の召喚獣が戦死する。

「ぎゃあああ!?!」

「たすけてえ!?!」

補習講師に連行される二人。

「遊星、助かったわ」

「無事で良かったよ」

「ところでさ、遊星は召喚獣を二体も出せたんだ……」

本来は召喚獣は一人一体であるのに二体も召喚獣を出せた遊星に明久は啞然とする。

「ああ、少し前に使えるとわかってな」

「なるほどね……じゃあ、作戦を再開しようか」

「そうだな」

「ええ」

遊星達は部隊を引き連れ、一気に教室前まで攻め込んだ。

第9問 協定と双子とFFF団（前書き）

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y.」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

不動遊星の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。二人ともきちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「これは僕のお祖母ちゃんが使っていた本です」

残念ながら不正解です。

これは惜しいですね、本棚と愛用の単語を知っていれば正解でした。英単語を勉強して次は正解できるようにしましょう。

吉井君は不動君に勉強を教えてもらっているらしいですね。

その努力が身につくよう頑張ってください。

第9問 協定と双子とFFF団

ひとまず戦いを終え、教室に戻ったFクラスに戻った遊星達は雄二の指示を聞く。

「これからCクラスに行つて協定を結んでくる」

「Cクラスに何かあるのか？」

「ムツツリーニからの情報でCクラスの様子が怪しいらしい。明久、遊星、姫路、俺と一緒に来てくれ」

「うん」

「ああ」

「わかりました」

それからムツツリーニを含めた五人でCクラスに向かう。

しかし、予想外の事態が起きた。

何故かCクラスにBクラス代表の根本があり、Fクラスが協定を破つたと言ってきた。

そして、Bクラスの生徒を引き連れて戦いを挑んできた。

「みんな、ここは逃げるぞ！」

点数が大幅に消費されていては戦死になる可能性がある。

何より、Fクラス代表の雄二がやられては元も子もない。

Cクラスを出て廊下に出ると、遊星は止まってBクラスの追っ手を睨みつける。

「雄二、みんなを頼む。ここは俺が食い止める」

「待て！ 遊星、お前をここで失うわけにはいかない！ そうだ、召喚獣で床を破壊しろ！」

「……なるほど。それなら、デュアルサモン二重召喚！ 『ジャンク・ウォリアー』
！ 『二トロ・ウォリアー』！！」

ジャンク・ウォリアーと二トロ・ウォリアーを呼び出し、二体は床に向かって拳を振り下ろす。

「スクラップ・フィスト！ ダイナマイト・ナックル！！」

床を粉碎し、煙が廊下に広がり、その隙に遊星達はFクラスまで一直線に向かう。

しかし、体の弱い瑞希はすぐに息を切らしてしまふ。

遊星は明久に耳打ちをする。

「明久、姫路をお姫様抱っこして死ぬ気で走れ」

「えっ！？」

「騎士ナイトが愛する姫プリンセスを運ぶんだ」

瑞希に好意を抱いている明久の目はメラメラと燃え上がり、気合いが最高潮まで達した。

「姫路さん、ゴメン！」

「えっ？ あっ、キヤッ!？」

明久は瑞希をお姫様抱っこをして走る。

「よ、吉井君……?」

「後でどんなお仕置きでも受けるから、今は僕に任せて！」

「は……はい！」

瑞希は頬を朱色に染め、明久の制服をギュッと握ってそのまま身を任せた。

「うおおおおおおおおおっ!!」

そして、明久は瑞希を抱き上げているのにもかかわらず、遊星達をあっという間に追い抜いた。

「単純だな、明久……」

「遊星、お前は意外に策士だな」

「……明久を扱いなれてもいる」

そして、遊星達も無事にFクラスに到着した。

「さて、お前ら」

「ん？」

その場にいる全員を見渡して雄二が告げる。

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

「雄二、考えがあるか？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

この日はそれで解散となり、続きは翌日へ持ち越しとなった。

遊星は下校の時にムッツリーニと話をする。

「康太、すまないが調べてほしいことがある」

「……何？」

「根本についてだ。小さなことまで調べられる範囲を全てを調べて欲しい。試召戦争で役に立つことがあるかもしれないから」

「……了解」

ムツリーニはそう言い残すと、忍者のように姿を消した。

翌朝。

「昨日言っていた作戦を実行する。秀吉にコイツを着てもらおう」

雄二はそう言うと、文月学園の女子の制服を取り出した。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

「木下優子？」

「秀吉の双子のお姉さんだよ」

「双子……？」

双子というキーワードに反応した遊星は右腕を見つめる。

(龍亞と龍可……みんなはどうしているかな……)

「遊星、どうしたの？」

「俺の仲間に双子の兄妹がいてな。ちょっとその二人を思いだして
いたんだ」

「へえー、そうなんだ」

「よし、着替え終わったぞい」

秀吉は女子の制服を着替え終わると、遊星は目をぱちくりさせる。

「何だか、昔同じようなことがあった気がするな……」

(これは誰が見ても女だな……秀吉を傷つけないために言わないが)

その後、Cクラスに行った秀吉は見事木下優子に演じきり、最高級の挑発を送ってFクラスに戻った。

「……遊星、これ……」

ムツツリーニは昨日遊星に頼まれた根本の調査報告書を渡す。

「ありがとう。後で何か貸しを一つだな」

「……うん」

「さてと……」

遊星はパラパラと報告書をめくる。

「なるほど……根本はCクラス代表の小山優香と付き合っていたのか……昨日Cクラスに根本がいたのはその為か」

遊星が呟くと、その言葉はFクラス中の生徒の耳に確かに届いた。

そして、須川を中心にFクラスのほとんどの生徒が遊星を中心に集まった。

「不動……今の話は真実か？」

「ん？ ああ。康太が調べてくれたからな」

「もっと詳しく聞かせてくれ」

体からどす黒いオーラを放つ須川達に、理由のわからない遊星は頭に疑問符を幾つも浮かべながら、取りあえず報告書を読み上げる。

「えっと……どうやら小山優香は根本に毎日弁当を作っているらしいぞ」

「うむ。ご苦労、不動一級審問官」

「ああ……は？ 一級審問官??」

遊星は疑問を浮かべ、須川の方を振り向く。

すると、須川達はいつの間にか全身黒服面と黒マントを着用し、どこから調達したのか、大鎌などの危ない武器を携えた。

「す、須川……皆……?」

「諸君。我々は何だ？」

「「最後の審判を下す断罪者、FFF団！」」

「我々が裁きを下す相手は誰だ？」

「「Bクラス代表、根本恭二！」」

「よろしい。総員、突撃だあーっ！！」

「「うおおおーっ！！」」

謎の怪しい宗教団体と化したFFF団はBクラスの生徒に向かって走り出した。

「何が……起きたんだ？」

「あれは異端審問会、FFF団じゃ」

理解不能に陥っている遊星に秀吉が説明する。

「異端審問会？」

「簡単に言えば、女子に全く縁のない奴らが嫉妬して女子と縁のある男子を粛清をする奴らじゃ。Fクラスを中心に勢力を拡大しておる」

遊星は呆れ果てて言葉が出なかった。

「僕も入っているよ。遊星と同じ一級審問官で」

「明久、俺は入ったつもりは無いんだが……」

（いや、待てよ？）

遊星は額を歪ませた。

（下手をしたら、俺も肅清対象じゃないのか？）

「遊星、どうしたの？」

「顔色が悪そうじゃが……」

「何だか……この後に起こりそうな展開が恐ろしくてな……」

「は?????」

明久と秀吉は首を大きく傾げて疑問符を頭に浮かべる。

そして、FFF団は鬼の補習などものともしない殺戮の使者と化し、一人一人がBクラスの生徒に向けて召喚獣を自爆特攻をした。

『許さん……よくも一人だけ良い思いを……お前らに独り身のつらさがわかるかあ!?!?』

自爆特攻によるダメージが10000点という有り得ない数字で、
どんどんBクラスを戦死者にするのだった……。

.

第9問 協定と双子とFFF団（後書き）

次回は根本フルボッコ話です（笑）

遊星と明久がキレます。

第10問 怒りと暴走とお膳立て（前書き）

さて、後は月曜日に一教科テストがあるのみです。

明日にはIS最新話を投稿します。

そして次回は明久と瑞希の告白イベントです。

第10問 怒りと暴走とお膳立て

Bクラス戦の二日目、『敵を教室内に閉じ込めろ』と雄二の作戦通りにFクラスを進軍させる。

しかし、ここで一つ問題があった。

(姫路の様子がおかしい……)

遊星は瑞希の視線の先を追った。

その先には根本があり、手に何かを持っていた。

(あれは……手紙？ まさか……)

遊星は通信機を使って小声で瑞希と話をする。

「姫路、もしかして……あの手紙は……明久へのか？」

『は、はい……』

瑞希は微かにだが、確かにそう言った。

(そうか……根本が盗んだのか……)

遊星は沸々と怒りが沸いてくる。

「わかった。俺が何とかして根本から手紙を取り戻す」

『で、でも……』

「俺を信じろ」

『わかり、ました……』

遊星は次に通信機を明久に連絡する。

「明久、問題が発生した」

『わかっているよ……根本が持っているものは姫路さんが大切にしていた物だ……』

明久はそれが誰宛かは知らないが、手紙の事は数日前から知っていた。

「明久、俺に考えがある。乗るか？」

『うん。姫路さんの為なら何でもやるよ！』

「良い答えだ。すぐにDクラスに行くぞ」

『わかった！』

遊星と明久はDクラスに向かった。

遊星と明久はDクラスに入るとそのまま壁を睨みつける。

「物理干渉能力のある俺と明久の召喚獣で壁をぶち壊して、根本に奇襲をかける」

「でも、召喚フィールドはどうするの？」

「それなら代用できる」

遊星は携帯電話を取り出してあるコードを入力する。

「D・ホイール、遠隔操作起動！」

駐輪場に置かれたD・ホイールが起動する。

「スピード・ワールド2、セット！」

『デュエルモード、オン！』

D・ホイールから音声と共にライディング・デュエルをする際に必要不可欠であるフィールド魔法『スピード・ワールド2』を発動させる。

スピード・ワールド2の特殊なフィールドは文月学園全体を包み込んだ。

「これで明久も召喚獣を出せるぞ！」

「わかった！ 行くよ、遊星！ 試獣召喚！！！」

明久の召喚獣が木刀を構えて現れる。

「ああ、試獣召喚！ 吼えろ、『ジャンク・バーサーカー』！！！」

現れたのは、真紅の鎧を身に纏い、巨大な斧とモーニングスターが合体した凶悪な武器を持った狂戦士。

「ジャンク・バーサーカー！ 壁を破壊しろ！！！」

《任せろ！》

ジャンク・バーサーカーは『バーサーカー・アックス』を逆に持ち替えて、斧からモーニングスターへ壁に向ける。

「バーサーカー・クラッシュュ！！！」

バーサーカー・アックスのモーニングスターで壁を全力で殴りつける。

ビシッ！！！！

モーニングスターで殴りつけた箇所から壁に大きなビビが出来、ジャンク・バーサーカーは一旦下がる。

「明久！！！」

「だぁぁーっしゅぁぁーっ！！！！」

召喚獣に持てる力を全て注ぎ込んで、壁を攻撃する。

ドゴオツ！！！

「んなっ！？」

「くたばれ、根本恭二いっつ！」

明久と遊星は根本に勝負を挑むために駆け寄った。

しかし、まだ教室に残っていた近衛部隊がその行く手をふさぐ。

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ お前らの奇襲は失敗だ！」

取り繕うように二人を笑う根本だが、遊星と明久は不敵の笑みを浮かべる。

「それはどうかな？ デュアルサモン 二重召喚！ 粉碎せよ、『ジャンク・デストロイヤー』！！！」

全てを破壊する四本の腕を持つ怒号の魔神、ジャンク・デストロイヤーが現れる。

「ジャンク・デストロイヤーの特殊能力、タイダル・エナジー！！」

ジャンク・デストロイヤーの胸にある球体からエネルギー体の波が現れ、近衛部隊の召喚獣と召喚者を教室から廊下へ流した。

「な、何い!？」

遊星と明久は根本召喚獣の対決が行える距離まで近づく。

「Fクラスの吉井明久と!!」

「不動遊星がBクラス代表、根本恭二に勝負を挑む!!」

「くっ、試獣^{サモン}召喚!」

『Fクラス 不動遊星&吉井明久 VS Bクラス 根本恭二
英語 410点&103点 VS 189点』

「なあっ!？」

「ジャンク・デストロイヤー! ジャンク・バーサーカー!!」

ジャンク・デストロイヤーは四本の腕にエネルギーを込め、ジャンク・バーサーカーはバーサーカー・アックスを振り上げる。

「デストロイ・ナックル! バーサーカー・スラッシュ!!」

四本の腕から拳の形をしたエネルギー体が放たれ、バーサーカー・アックスで床を砕いて衝撃波を放つ。

根本の召喚獣は何もする事が出来ず、ただその攻撃を受けるしかなかった。

そして、召喚獣の点数は一気に二桁まで消耗する。

「明久、決める!!」

「いつけえええっ!!」

明久の召喚獣は足に力を入れ、ジャンプして根本の召喚獣の懐に入り、木刀を胸に突き刺した。

今ここに、Bクラス戦は集結した。

だが、

「そのまま根本をぶっ殺す!!!」

「その腐った性根を徹底的に叩き潰してやる!!!」

もはや冷静さを完全に失い、対象である根本を完膚無きまでに叩き潰す邪神と化した明久と遊星は召喚獣に命ずる。

三体の召喚獣は目がキラリと光り、召喚獣から根本に襲いかかる。

「ま、待て! 試召戦争はもう終わったんだぞ!?!」

根本は逃げようとしたが、試召戦争が集結したことにより、補習室に行っていた須川率いるFFF団のみんなが速攻で生還してきて、根本の周りを囲んだ。

「根本恭二、くつたばれっ!!」

「くつたばれ!!」

「吉井、不動、奴を殺せえっ!!」

「殺せえ!!」

目の前には怒号と忘我によりと邪神と化した遊星と明久、その周りには嫉妬からの狂気に取り憑かれたFFF団。

根本が逃げられるはずがない。

「ちよっ、だ、誰か助け……グギャアアアアアアアアアアッ!!」

召喚獣三体による根本への制裁というなの天罰が下った。

但し、後の戦後処理のことがあるので、顔だけは狙わなかった。

そして、鉄人が現れて、暴走する二人を何とか止めたのだった。

本来なら遊星と明久は何らかの処分を受けるはずだったが、特別措置とも言える召喚獣の暴走と言うことにし、二人は鉄人からの嚴重注意で済んだ。

それから、遊星は根本のポケットから瑞希の例の手紙を抜き取った。

「明久、これは俺が瑞希に渡しておく」

「うん、よろしく頼むね」

一旦、明久と別れた遊星は手紙を持って小さく笑う。

(さて……最近頑張っている明久にお兄さんからお膳立てという素敵なプレゼントをしてあげよう)

遊星はそのまま瑞希の所へ行った。

第11問 告白とAクラスと賭！？（前書き）

バカテスト 数学

問 以下の問いに答えなさい。

□ (1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、？の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

□ (1) $X = \frac{\pi}{6}$ (2) ?

不動遊星の答え

□ (1) $X = \frac{\pi}{6}$ (2) ?

教師のコメント

そうですね。

角度を『 $\frac{\pi}{6}$ 』ではなく『 $\frac{\pi}{6}$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

□ (1) $X = \text{おおよそ}$

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くでも点数はあげられません。

吉井明久の答え

『 (1) $X \parallel / 6$ (2) ? 』

教師のコメント

流石、理数系の強い不動君に教えられている事だけはありますね。ですが、(2)の解答が残念ながら不正解です。

第11問 告白とAクラスと賭!?

遊星は瑞希を屋上に呼んで盗まれた大切な手紙を渡す。

「ありがとうございます。不動君!」

「俺だけじゃない。明久も頑張ったよ」

「そ、そうなんですか!? 吉井君を探してきます!」

「待て姫路。探さなくてもいい」

遊星は通信機で明久と連絡する。

「明久、まだ学校にいるか?」

「うん。雄二と少し話をしていたからね」

「今すぐダツシュで旧校舎の屋上に来るんだ」

「え? 旧校舎の屋上?」

「姫路が明久に大事な話をしたいそうだ」

「姫路さんが!? 五分以内に行きます!」

通信を切ると、遊星は微笑みながら瑞希を見る。

「五分以内に明久が来るそうだ」

「は、はい」

「姫路。夕暮れ時に屋上で明久と二人つきり。頑張れよ」

「ふえええええつ!?」

ニヤニヤする遊星に瑞希は顔が真っ赤になる。

「明久は男女関係なく他人を引きつける魅力があるからな。早めに明久を自分のモノにしといた方がいいぞ」

そう言われた瑞希は両手に握り拳を作った。

「わ、わかりました！ 私、頑張ります！」

「ああ。頑張れよ」

遊星は瑞希に手を振ると、屋上から出て行った。

数分後、全力疾走して来た明久が屋上にやってきた。

「ひ、姫路さん……お待たせ」

「吉井君、大丈夫ですか!？」

「大丈夫だよ……それより、大事な話って何？」

「えっと……まずは、この手紙を……」

その手紙を見ると、明久は落胆した。

「……………ああ、雄二へのね」

明久はその手紙を雄二へ渡すものと勘違いしているのである。

瑞希は首を激しく横に振って否定する。

「ち、違います！ これは坂本君への手紙じゃありません！！」

「へ？ じゃあ、誰の……………？」

明久は首を傾げて疑問符を浮かべる。

瑞希は頬を朱色に染めながら両手で手紙を明久に差し出す。

「姫路さん……………？」

「この手紙は……………吉井君、私があなたに宛てた手紙です」

「は、い……………？」

訳が全く分からない明久は無意識に手紙を受け取った。

そして瑞希は顔を真っ赤にし、頭を勢いよく頭を下げながら叫んだ。

「吉井君、私はあなたが大好きです！ 私と付き合ってください！！」

「……………え????」

突然の瑞希の告白に、明久は思考停止まで追い込まれ、体が固まった。

「吉井君…………？」

瑞希に呼ばれ、思考停止から戻ってきた明久はハッと気付くと瑞希に負けないぐらい顔を真っ赤にした。

「ひ、姫路さんが僕のことを…………？」

「は、はい！ 小学生の時から好きでした。この気持ちに気付いたのは振り分け試験の時でした。吉井君の明るくて優しいところ、何かに向けて一生懸命やるところ…………吉井君の全てが大好きです！！」

熱烈な瑞希の告白に明久は戸惑いながらも自分の気持ちを打ち明ける。

「ぼ、僕も、姫路さんの事が…………だ、だ、だ、大好きです！！」

瑞希は満面の笑顔になら、明久に迫る。

「じゃあ…………私と結婚してくれますか!？」

「喜んでー!!」

明久は即答してしまうがすぐに違和感を感じる。

「……って、あれ？ 結婚!？」

「そうです！ 今すぐに結婚できませんが、私は今から明久君の妻です!!」

色々つぶつ飛ばしているため、明久はかつてない困惑をする。

「ま、待って！ 姫路さん、結婚って色々つぶつ飛んでるよ!!」

「ダメ、ですか……？ 私じゃ、明久君の妻にはなれませんか……？」

瑞希は涙目となり、上目遣いで明久を見る。

ズキーン!!!

明久は瑞希の可愛さにハートが射抜かれてしまった。

「ダメじゃないよ！ 今から僕は、瑞希の夫だよ!」

遂には明久もつぶつ飛んでしまった。

「大好きです、明久君!!!」

瑞希は明久に抱きつき、明久はしっかりと受け止める。

「え？ 姫路さん、今僕の名前を……」

「明久くんも、私の名前を呼んで下さい」

瑞希にそう言われ、明久は少し恥ずかしかったが、瑞希の名前を呼ぶ。

「えっと……瑞、希……」

「はい、明久君」

そして、二人は何も言わずに顔を近づけ、そのまま唇を重ねた……。

それから数日後、明久と瑞希が付き合っていることは秘密のままAクラスに宣戦布告をしに行く。

今回は代表である雄二を筆頭に、遊星、明久、瑞希、秀吉、ムッツリーニの首脳陣揃いで来ている。

雄二がAクラスに一騎討ちの勝負を交渉する。

しかし、Aクラスは代表同士の一騎討ちではなく、五人ずつの一騎討ち。

つまり、個人競技のスポーツの団体戦と同じ勝負方法を要求してきた。

雄二はその要求を呑み、逆に勝負内容の決定権を要求した。

そこに、

「……………受けてもいい」

雄二の幼なじみで、Aクラス代表の霧島翔子が出て来た。

「……………雄二の提案を受けてもいい。その代わりに、条件がある」

「条件？」

「……………うん。……………負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

「じゃ、どうしよう？ 勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

そう提案してきたのは、秀吉の双子の姉の木下優子である。

「交渉成立だな」

こうして明日の試召戦争の勝負方法が決定した。

すると、優子が秀吉に近付く。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

遊星は直感で秀吉に生命の危機が迫っているのを感じ取った。

「待て、木下優子。秀吉、俺の後ろに隠れろ」

秀吉を後ろに隠し、遊星は優子と対峙する。

「あなた、何をするの？ えっと……」

「不動遊星だ」

「ああ、鬼神の不動明王ね。秀吉をこっちに渡しなさい」

「断る。秀吉に酷いことをするつもりだろう？」

「な、何じゃとー!？」

「あら、わかっちゃった？ 秀吉がCクラスの人達を豚呼ばわりしているからそのお仕置きをしなくちゃいけないのよ……」

優子は右手をバキツボキツと怪しく動かす。

「あれはFクラス代表の雄二が指示したこと。秀吉は何も悪くない」「だとしてもね、私は秀吉の関節をあらぬ方向に曲げてお仕置きしないと気が済まないのよ」

遊星は仲間が傷つく姿を見たくない。

ため息をつき、ゆっくり目を閉じて口を開く。

「……わかった。木下優子、一つ提案がある」

「何かしら？」

「明日の試召戦争、俺と勝負しろ。俺が勝ったら秀吉に手を出すな」

「へえー、じゃあ私が勝ったらあなたはどつするの？」

「お前が……勝ったら俺と秀吉をお前の好きにしる。何でも言うことを聞く」

「遊星！ 一体お主は何を言っているのじゃ!？」

秀吉の叫びを無視し、優子は目を丸くする。

「何でも……? その言葉に嘘偽りは?」

「俺は約束を絶対に破らない」

遊星の真剣な瞳に対し、優子は少し考えた。

(うーん、よく見れば、不動遊星って結構イケメンよね……私が勝つて秀吉と一緒に好きにできるなら……)

木下優子は優等生を演じているが、大好物はBL本である。

つまり、考えられることはただ一つ。

『秀吉……』

『ゆ、遊星え……』

『俺も初めてだ。優しくするから……』

『た、逞しい体をしておるな……』

『秀吉こそ、綺麗な肌だ……もう、我慢できない』

『あっ……』

優子は表情に出していないが、脳内の腐女子力が完全に暴走している。

(えへへ……イケメン×美少年……これは良いわね。Fクラスの写真家に撮影を頼まなくちゃ)

「わかったわ。その勝負、買うわ！ 教科はあなたが決めなさい！」

「教科は……数学で勝負だ」

「いいわ、不動遊星。明日が楽しみね」

「望むところだ」

二人を中心に火花が散り、それぞれの思いを胸に、明日の試召戦争最終決戦を待った。

おまけ。

「明久、お前に渡すものがある」

「ん？ 遊星、このカードは何？」

「お前の召喚獣を進化させるものだ。絶対に役に立つはずだ」

「本当に！？ じゃあ、ありがたく使わせてもらおうよ」

「ああ、明日の試召戦争を頑張ろう」

「うん！」

第12問 最終決戦と黒星と白星（前書き）

長らく更新が遅れてすいませんでした！

m ((m

ISは明日に更新しますので（汗）

第12問 最終決戦と黒星と白星

Aクラスへの宣戦布告の翌日の10時、遂にFクラス最後となる試召戦争が始まる。

「では、両名共準備は良いですか？」

Aクラス兼学年主任の高橋先生が立会人を務める。

「ああ」

「……問題ない」

一騎討ちの会場はAクラスである。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「……………（スック）」

ムツツリーニから立ち上がった。

初めに白星を出して残りの四人の気合いを奮わせる為に保健体育での勝率の高いムツツリーニを出したのだ。

「じゃ、ボクから行こうかな」

Aクラスからは色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出て来た。

「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

高橋先生がムツツリー二に尋ねる。

「……………保健体育」

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

すると、愛子はムツツリー二から待機している明久と遊星に視線を向けた。

「そつちの二人、吉井君と不動君だっけ？ もし保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？ もちろん実技で」

明久はときめいてしまい、遊星はため息をついて額を手で押さえる。

「フツ。望むとこ ムゲツ！？」

明久が言い掛けた瞬間、瑞希が明久の頭を掴んで自分の胸の谷間に押しつける。

「ダメです！ 明久君に保健体育の実技を手取り足取り教えるのは妻である私の役目です！！」

「ちよっ、瑞希！？」

「……………っ！？ 手取り足取り (プシャアアアアア)！？」

瑞希の爆弾発言に、ムッツリーニは鼻から大量の鼻血を噴き出した。

「そっか……じゃあ、不動君は？」

愛子は明久から遊星に狙いを定めるが、遊星は秀吉の後ろに隠れて首を横に振る。

「全力で遠慮させてもらおう」

「あらら、残念だね。それじゃあ、土屋君。やろうか　って、大丈夫！？」

ムッツリーニは大量の鼻血を出してしまい、その場に倒れてしまっていた。

「……工藤愛子、恐るべし　（ガクッ）」

まさかの鼻血の多量出血でムッツリーニは気を失ってしまった。

「こ、康太！？」

「ムッツリーニイイイ！？」

遊星と明久は急いでムッツリーニのところまで駆け寄る。

「遊星、急いでムッツリーニに輸血しなきゃ死んじゃうよー！」

「まさか鼻血の大量出血で生死をさ迷うことになるなんて……」

これではムッツリーニが戦うのは不可能である。

雄二は首を横に振る。

「仕方ない……一回戦はウチの不戦敗で良い……」

「では、次の方どうぞ」

「ここは……遊星、頼むぞ」

雄二は早くも遊星を出した。

「わかった。木下優子、昨日の約束通り勝負だ!!」

「わかったわ。この勝負に勝って、あなたが負けたら秀吉と一緒に罰を受けてもらうわ!」

(イケメン×美少年のBL撮影会をね!!)

優子のある意味恐ろしい罰に一瞬遊星と秀吉は身震いをする。

「ゆ、遊星! 必ず姉上に勝ってくれ! 姉上の隠された性格から考えると、ワシらは色々なモノを失う予感がするのじゃ!!」

心配する秀吉をよそに、遊星はグッドサインを送る。

「大丈夫だ。俺は必ず勝つ!」

「随分な自信ね。それじゃあ、数学で勝負よ。試獣召喚^{サモーン}!!」

『Aクラス 木下優子

数学 376点

「さあ、どうかしら？」

優子は腕を組んで不敵な笑みを浮かべた。

遊星は大きく深呼吸をし、右手を胸の前に置いた。

「……集いし願いが新たに輝く星となる」

Aクラスに青白く光り輝く星屑の光が散布される。

「な、何よこれ!？」

対戦者である優子や、FクラスとAクラスの生徒もざわざわと驚いた。

遊星は右手を高く上へと掲げる。

「光さす道となれ！」

星屑の光が遊星の前に集まり、形を成す。

「試獣^{サモン}召喚!! 飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』!!!」

現れたのは、遊星のデッキのエースモンスターで、遊星が最も大切にしている『絆』を象徴する星屑の光を放つ美しい竜である。

「綺麗……」

対戦者である優子は本当に自分の目を疑った。

「な、何よこの点数は！？ これって教師レベルの点数じゃない！？」

優子の言うとおり、遊星の叩き出した点数はAクラスの生徒でも取れることの出来ない、文月学園の教師レベルの点数である。

「今回は最終決戦だからな、本気を出させてもらった！」

《行くぜ、遊星！ あの子にファイナル・アタックだ！》

「ああ！ 行け、スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴンは口に星屑の光を吸収する。

「響け、シューティング・ソニック！！！」

白銀のドラゴン・プレスを放出し、優子の召喚獣に迫る。

「よ、避けきれな きゃあああああつ！！！」

為す術のない愛子の召喚獣は白銀の閃光に包まれ、一瞬にして点数がゼロとなり、塵として跡形もなく消えた。

圧倒的な点数で遊星が見事勝利を納めたことで、1勝1敗の同点の引き分けとなる。

そして、遊星に敗北した優子はその場に座り込んでしまった。

「負け、ちゃった……」

始めてAクラスに黒星を与えてしまったことで相当なショックを受け、悔しさに優子は涙を浮かべる。

遊星は優子の所に行き、腰を下ろした。

「木下優子、大丈夫か？」

「不動遊星……どうして？」

「何がだ？」

「あなたほどの実力があいながら、どうしてFクラスに？ あなたならAクラスに来てもおかしくないのに……」

「俺は、このFクラスが気に入っているんだ」

「最低クラスなのに……？」

「そんなのは関係ない。Fクラスのみんなは俺の大切な仲間だからな」

「仲間……」

「仲間の絆がある限り、俺は絶対に負けない」

遊星は優子を立たせると、優子は涙を拭い、笑顔を見せた。

「今回は負けたけど、次は負けないわ」

「望むところだ。優子」

「え？」

「もう俺達はただの知り合いじゃないからな。名前で呼ばせてもらう」

「わかったわ、遊星」

遊星と優子は握手をし、優子は無意識のうちに遊星の仲間となった。

第13問 同調と思いと新しい想い？（前書き）

バカテスト 物理

問 以下の文章の（ ）（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

不動遊星の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『波動』

教師のコメント

まともな答えですが、それでは前文の波と同じです。

第13問 同調と思いと新しい想い？

FクラスVS Aクラスの三回戦。

Aクラスから佐藤美穂が出てくる。

「私が出ます。物理でお願いします」

「じゃあ……僕が行くよ！」

Fクラスからは明久が出る。

「明久君、頑張ってください！」

「明久、お前ならいけるぞ！」

瑞希と遊星の声援に明久は拳を高く上げる。

「あ、高橋先生。試召戦争を始める前に少し待ってくれませんか？
ちよつと準備があるんで」

「わかりました。では、どうぞ」

「はい、それじゃあ……試験召喚獣、サモン試獣召喚！」

明久はいつもの改造学ランに木刀の召喚獣を呼び出す。

「それから……」

明久はポケットから一枚のカードを出してチラッと遊星を見る。

遊星は微笑みながら頷く。

(遊星、君の絆の力を借りるよ!!)

「出でよ、僕の新たな力!」

明久はカードを上投げる。

「試獣^{サモ}召喚! 『ジャンク・シンクロン』!!」

カードが一瞬光り、明久の召喚獣の隣に遊星が長年使ってきたチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンである。

「行くよ、ジャンク・シンクロン!」

《任せろ、明久!》

ジャンク・シンクロンは腰のレバーを思いつきり引く。

ジャンク・シンクロンは三つの星から輪となり、明久の召喚獣に纏う。

「同調^{シンクロ}試獣^{サモ}召喚!!!」

明久の召喚獣は光の柱に包まれ、新たな姿へと進化する。

光が止み、明久の召喚獣は前とはかけ離れた姿になっていた。

体はジャンク・シンクロンの進化形態であるジャンク・ウォリアーの鎧を身に付けており、木刀は巨大な大剣となっていた。

「名付けて、『ジャンク・ソードマン』!!」

これは遊星のチューナーモンスターを召喚獣とシンクロすることによって新たな姿へと進化する同調試獣召喚である。

佐藤美穂は口を開いて啞然とするが、首を横に振って召喚獣を呼ぶ。

「サ、試獣^{サモン}召喚！」

中華風の衣装に鎖鎌を持つ召喚獣が現れる。

『Fクラス 吉井明久 VS Aクラス 佐藤美穂
物理 104点 VS 389点』

「よし……これなら、勝てる！」

明久と美穂の点数差はかなりあるため、美穂は勝つ自信を持てた。

「行け！」

美穂は一撃必殺を狙いに召喚獣を操り、ジャンク・ソードマンを攻撃する。

「そう簡単には、やられないよ!!」

ジャンク・ソードマンはスケート靴に似たブレードで滑走し、召喚獣の攻撃を回避する。

「速い!?!」

「喰らえっ!?!」

ジャンク・ソードマンは大剣を振り下ろして美穂の召喚獣に攻撃する。

(戦いを長引かせたら、観察処分者の彼の方に分がある……ここなつたら!?!)

美穂は召喚獣に意識を集中させ、後ろに数歩下がると、鎖鎌の鎖分銅をジャンク・ソードマンの足に投げる。

「くっ!?!」

ジャンク・ソードマンの足に鎖が巻きついた。

「これで……勝負です!?!」

召喚獣は鎖を引っ張り、ジャンク・ソードマンを引き寄せて鎖鎌の前に突き出す。

「望むところだ! ジャンク・ソードマン!?!」

ジャンク・ソードマンの目が一瞬光り、大剣を振りかぶる。

「剛碎戦神剣!?!」

大剣 戦神剣の強力な一撃が振り下ろされ、美穂の召喚獣が押し

潰されて爆発した。

「よし！ 勝つ　ぐわああああっ！?!?!?」

明久は手を握りしめて勝利を確信した瞬間、心臓の辺りを握りしめて倒れた。

「倒したのに、何、で……?」

明久は自分の召喚獣であるジャンク・ソードマンをよく見た。

なんと、ジャンク・ソードマンの胸には美穂の召喚獣の鎖鎌の鎌が突き刺さっていた。

試験召喚獣は人間の急所を攻撃されると即死になってしまうのだ。

美穂は明久が戦神剣を振り下ろすと同時に鎌の刃を心臓に突き刺したのだ。

そして、フィードバックにより、明久の胸に激痛が走ったのだ。

「この勝負、召喚獣が同時に戦死したのでドローとします」

高橋先生の宣言により、1勝1敗1引き分けの勝率がリセットとなる。

「明久君！」

「明久！」

瑞希と遊星は明久に駆け寄り、遊星は明久を抱き上げる。

「ごめん、瑞希、遊星。勝てなかったよ……」

「いいえ、明久君はよく頑張りました。自分を攻めることはありません！」

「Aクラスのあの子は勝てないと見越してドローに持ち込んだんだ。それほどお前を脅威に感じたんだ」

「二人共……」

そこに雄二が明久の肩を叩いた。

「明久、良くやったお前は休んでいる。姫路、次は頼んだぞ」

「は、はい……」

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから、学年次席の久保利光が出てくる。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします！」

「わかりました。全力で相手をします！」

瑞希と久保は対峙して手を前に出す。

「「試^{サモン}獣召喚！！」」

瑞希と久保は召喚獣を出して、一瞬で決着がついた。

『Fクラス 姫路瑞希 VS Aクラス 久保利光
総合科目 4571点 VS 3997点』

「ぐっ……！ 姫路さん、いつの間にこれほどの実力を……？」

圧倒的な点数差に久保は悔しそうに瑞希に尋ねる。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人のために一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです！」

瑞希の思いにFクラスの生徒は心が癒され、久保は納得したように微笑んだ。

「なるほど……君の思いは本物だね。だけど、姫路さんには彼が居るからってのもあるよね？」

久保はAクラスから椅子を借りて休んでいる明久を見る。

「吉井明久君。彼が居るから、君は頑張れるんだよね？」

「ふええ！？ あ、あの、久保君！？」

「はっはっは！ それじゃあね！」

久保はその場から立ち去り、瑞希は顔を赤くしながら明久の所へ行く。

「ただいま帰りました、明久君！」

「うん、瑞希。おかえり」

そんな二人の光景を遠くから美波と秀吉が見る。

「なんか、二人はいい雰囲気よね……」

「じゃな……」

美波は横目で秀吉を見る。

「ん？ どうしたのじゃ、島田？」

「な、何でもないわよ……！」

美波は顔を激しく左右に振った。

（木下の可愛い顔に見とれていたなんて言える訳ないでしょ……！）

それはさておき、遂に短いようで長かったFクラスVS Aクラスの最後の戦いが始まる。とす。

.

第14問 終戦と決意と新たな波乱(前書き)

バカテスト 英語

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびのbadの比較級と最上級をそれぞれ答えなさい』

姫路瑞希の答え

『goodbetterbest』
『badworsetworst』

不動遊星の答え

『goodbetterbest』
『badworsetworst』

教師のコメント

その通りです。二人とも見事です。

吉井明久の答え

『goodbetterbest』
『badworsetworst』

教師のコメント

吉井君、一体どうしたんですか？
すごい成長ぶりで驚きました。

土屋康太の答え

『badibutteribust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

バカテスト 化学

問 以下の問について答えなさい

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『C6H6』

不動遊星の答え

『C6H6』

吉井明久の答え

『C6H6』

教師のコメント

3人共お見事です。

吉井君もよく頑張りました。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか？
後で職員室に来てください。

バカテスト 保健体育

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二性徴調期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

不動遊星の答え

『初潮……か……？』

吉井明久の答え

『えっと、確か、初潮だったっけ……？』

教師のコメント

二人共正解です。

それから、解答に自信を持ってください。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係にあり、体重が43kgに達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

バカテスト 生物

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『?脂質 ?炭水化物 ?タンパク質 ?ビタミン ?ミネラル』

吉井明久の答え

『？脂質　？炭水化物　？タンパク質　？ビタミン　？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。

吉井君も素晴らしいです。

不動遊星の答え

『？絆　？仲間　？デュエルモンスターズ　？D・ホイール　？珈琲』

教師のコメント

まさか不動君がこんな回答をするとは思いませんでした……どうやら不動君の大切な物と勘違いしてしまったようです。おそらく、それで生きられるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

.

第14問 終戦と決意と新たな波乱

FクラスとAクラスの試召戦争は、2勝1敗1引き分けてFクラスが一步リードしている。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは学年主席の霧島翔子。

「俺の出番だな」

そして、Fクラスから坂本雄二が出る。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ」

雄二は最後の戦いに望む。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

視聴覚室に移動した二人は早速試験を開始する。

そして、結果は……。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

V S

《Fクラス 坂本雄二 53点》

予想だにしなかった雄二の敗北により、2勝2敗1引き分けという結果となった。

床に膝をつく雄二。

「……すまない」

それしか言えないのも当然だった。

「えっと……この場合はどうなるの……?」

「一般的な団体戦の方式で普通に考えるなら、五人の中から代表を一人選んで勝負を決めるはずだが……」

明久と遊星は首を傾げたり髪を手櫛でかいたりして悩んだ。

「その試召戦争の結果、私に決めさせな!」

Aクラスの教室に響く声に生徒達全員は振り向いた。

そこには文月学園の学園長、藤堂カヲルがいた。

「AクラスとFクラスの対決は引き分け。更に、両クラスは三ヶ月試召戦争を禁止するよ」

試召戦争の結果が引き分けに終わってしまった。

「な、何ですか!?! 学園長!!! こういう時は代表戦で決まるんじゃないんですか!?!」

明久はカヲルに食ってかかる。

「確かにそうだ。だけどねえ、私としてはここで勝負が決まっちゃうのはつまらないのさ」

「つまらない……?」

「Fクラスがまさかここまで這い上がるなんて正直私も驚いたさ。」

だからこそ、この文月学園の試召戦争の歴史に残るようなこの戦いを新学期からたった数週間で終わらせるなんて残念じゃないか」

「だ、だけど、僕達は設備を向上するためにみんなでここまで頑張つて来たのに……幾らなんでも勝手にすぎますよ!!」

明久の言うことは誰が聞いても最もである。

カラルも流石に勝手だと思い、納得させるための条件を提示する。

「わかったわかった。Fクラスの整備をEかDクラス並みにしてやるから、それで良いだろ？」

まさかの学園長からの整備向上に明久だけでなく、Fクラス全員が驚いた。

少なくとも、現Fクラスのボロい整備からマトモな机や椅子がある整備へと向上出来る。

「わかった。学園長がそう言うならそうしよう」

「雄二!？」

「明久、お前の言いたいことはわかる。前の俺ならお前と同じく抗議していただろうが、今日の試召戦争で考え方は変わった」

「え？」

「明久と遊星、そして今日見せた同調試獣召喚。あれを見て思った。ここでまだ終わらせたくない。どうせなら、もっと可能性を広げて

Aクラスに勝ちてえんだ！！」

雄二の燃え上がるような熱い思いに同じ男として明久も心に何か
燃え上がった。

「……わかったよ、雄二に従う。みんなはどうする？」

明久はFクラスの仲間たちに意見を尋ねる。

Fクラス全員は誰も文句は言わず、一つ頷いた。

こうして、FクラスとAクラスの試召戦争はドローと言つまさかの
結果で終戦した。

次の戦いは三ヶ月後、Fクラスは新たに決意を固めて打倒Aクラス
を目指すのだった。

試召戦争が終わってから明久と遊星達はFクラスに戻った。

「取りあえず、この最低な設備からしばらくおさらばだね」

「ああ。そして、次の試召戦争までの三ヶ月、頑張らなきゃな」

「頼りにしているよ、遊星」

「こっちもだ、明久」

二人は拳をぶつけ合って絆を深めた。

「ねえ、吉井、不動。これからみんなでカラオケとかで打ち上げしない？ Aクラスとの引き分け記念ってのはちよつと変だけどね」

美波は苦笑を浮かべながら提案する。

「でも、良いんじゃないでしょうか。私は賛成です」

「うむ、ワシもじゃ」

「……………俺も」

瑞希、秀吉、ムッツリーニはそれに賛成する。

「じゃあ、行こうか。まだお小遣いも残っているし、遊星は？」

「カラオケか……………行ったことがないから楽しみだな」

「それじゃあ、みんなであれ？ 雄二は？」

Fクラスメンバーの中心人物である雄二が何故か居なかった。

「坂本君なら、霧島さんに連れられてどっかに行っちゃいましたよ？」

疑問に思う明久に瑞希が答える。

「霧島さんが？ そう言えば雄二とは幼なじみだったね……一応電話しようかな？」

明久は携帯電話で雄二を呼び出す。

「あ、雄二？ これからみんなで……」

「あ、明久！ 頼む、助けてくれ！！ ま、待て、翔子！ 頭を掴
ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

『雄二、今からデート。浮気は許さない……』

『どこをどう聞いたら浮気なんだ！？』

「えっと……霧島さん？」

呆然としながら電話の向こうにいる翔子に向けて尋ねた。

『ごめん、吉井。これから雄二とデートなの。邪魔しないで』

おそらく雄二から携帯電話を奪った翔子は殺気の籠もった声で話す。

「え？ あ？ う、うん。霧島さんって、雄二と付き合っていたの？」

『今さっき、私が告白して雄二からOKを貰った』

『違つだろ！ お前が無理や ひにゃああああああああああ
ああああああ！』

『雄二は照れ屋さん』

電話越しにで何が起きているか想像はしたくないが、取りあえず明久は両手で悪友に向けて合掌した。

(雄二、君の骨は拾って埋めておくよ)

「わかった、霧島さん。雄二とのデート、楽しんできてね。あと、雄二はすぐに逃げ出すかもしれないから手錠や首輪で繋いだ方がいいよ」

『ありがとう、吉井。早速やってみる』

『明久、テメエ！ 翔子に何を』

「じゃあね。二人共、末永くお幸せに」

ブチッ。

明久は通信を切り、携帯をボタンと閉じた。

「雄二は霧島さんと用事があるから来れないって」

「それじゃあ、行きましようか」

美波の先導で明久と遊星達は文月学園近くのカラオケ店へ向かう。

遊星達が校舎の玄関を出た瞬間、平凡な事態が急変した。

突如、遊星の赤き竜の痣が服越しに強い光を放つ。

「何だ!？」

明久達も驚いており、言葉すら忘れてしまっている。

遊星は赤き竜の痣を左手で押さえながら空を見上げた。

その時、上空の空間がぐにやりと歪み、中から複数の何かが出てくる。

「まさか……」

遊星は自然に体が動き、手を上に上げた。

「試獣^{サモン}召喚! 『スターダスト・ドラゴン』!」

遊星はスターダスト・ドラゴンを召喚した。

しかし、デフォルトではなく、真の姿である巨大なドラゴンだった。

そして、遊星は空に向かって叫んだ。

「アキ！ ジャック！ クロウ！ 龍亞！ 龍可！」

空から降ってきたそれは、遊星と強い絆を結ぶ5人の仲間達。

チーム5D'sのメンバーだった。

第14問 終戦と決意と新たな波乱（後書き）

今回で試召戦争編は終了となります。

なので、前書きに溜まっていたバカテストをすべて載せました。

今回はチーム5D・s集合で、すぐに清涼祭編に突入します。

第15問 再会と集結と後の伝説（前書き）

今回は妙に長くなりました。

今回は清涼祭に入れると思います。

そうしたら龍亞と龍可の出番が増えると思います。

第15問 再会と集結と後の伝説

FクラスとAクラスの試召戦争が終わったのも束の間。

空から遊星の仲間、十六夜アキ、ジャック・アトラス、クロウ・ホーガン、龍亞、龍可がD・ホイールとデュエルボードと一緒に落ちてきた。

「な、何なの!?!」

「ここは一体どこだ!?!」

「そんなこと言ってないで早く何とかしないとマズいぞ!」

「る、龍可、俺に掴まって!」

「う、うん!」

真っ逆様に地上へと落ちていくアキ達。

唯一助かる方法として、アキのデュエルモンスターズを実体化させるサイコパワーを使えば何とかなるが、デュエルディスクが手元に無いため使えない。

その時だった。

「アキ！ ジャック！ クロウ！ 龍亞！ 龍可！」

「……………えっ！？……………」

地上から遊星が叫び、スターダスト・ドラゴンが飛んできた。

（スターダスト・ドラゴンだけじゃ足りない……点数をかなり消費するが仕方ない！）

「シックススタフルサモン六重試獣召喚！ 『ジャンク・ウォリアー』！ 『ニトロ・ウォリアー』！ 『ターボ・ウォリアー』！ 『ロード・ウォリアー』！ 『ジャンク・デストロイヤー』！」

遊星は召喚獣に置いて異例中の異例である『召喚獣六体同時召喚』を行い、ジャンク・ウォリアー率いる五体の戦士たちを本来の姿で呼び出した。

「みんなを頼む!!」

召喚獣達は頷き、アキ達とD・ホイールを受け止め、ゆっくり地面に降ろす。

「みんな!」

「「「「遊星!!」「」「」」」

遊星達は互いに駆け寄る。

「遊星……心配したんだからね!!」

「全く……お前はいつもいつも心配をかけて!」

「俺達、何週間も探し回ったんだぜ!!」

「そうだよ! 行方不明だからネオ童実野シティ外もいっぱい探したんだよ!」

「でも良かった。遊星が無事で……」

アキ達に心配をかけた遊星は頭を下げ、謝罪する。

「みんな、すまない……心配をかけた」

だが、アキ達はすぐに笑顔となり、再会を喜び合った。

そこに今まで呆然としていた明久達が来た。

「あの、遊星……その人達は？」

「ここにいる5人は俺の大切な仲間達だ」

「遊星の？」

遊星はアキ達を紹介しようとしたその時だった。

「全く、あなたは次々と問題を起こすね」

「学園長と西村先生！？」

鉄人を引き連れたカヲルがやって来た。

「ここにいる全員は今すぐ学園長室まで来るんだ」

「そこにいる霧島と坂本もだ！」

鉄人が指さした先には校舎の影に隠れていた雄二と翔子が出て来た。

「バレたか……鉄人は本当に俺達と同じ人間か？」

「雄二、デートはまた今度……じゃないと……」

「了解しました……」

こうしてFクラスメンバーと翔子、そしてチーム5D・Sが学園長室に半強制的に連れてかれた。

「さて、聞かせてもらうよ。洗いざらい全部な」

「わかった」

遊星は学園長だけでなく、明久達に全てを話した。

遊星達、神の化身である『赤き竜』に選ばれた戦士『シグナー』と冥界の神に選ばれた戦士『ダークシグナー』と世界の命運を懸けた戦い。

そして、未来人のイリアステルの三皇帝とゾーンとの未来を懸けた戦い。

壮絶なる戦いに明久達は当然驚愕した。

「じゃあ、遊星達六人がこの世界に来たのは、その赤き竜が何らかの役目を果たさせるために送ったのかな？」

明久が自分の考えを伝えると、遊星は頷いて同意する。

「その可能性は大きい。そうでなくては辻褃が合わないからな」

「もしかしたら、文月学園にも何か大きな影響を与えるかもしれないな」

いね」

「だとしたら、一番に考えられるのは召喚獣システムだな」

「だよな……って、みんな、どうしたの？」

雄二達が目を丸くして明久を見つめる。

「明久、今日はどうした？ いつもと違って頭が働くな……」

「それは遠まわしに僕をバカにしているのかな？」

明久は頭の中でどうやって雄二を抹殺するか考えた。

しかし、それを学園長の言葉によって遮られる。

「十六夜アキ、ジャック・アトラス、クロウ・ホーガン。お前達三人は不動と同じくこの文月学園に通ってみるかい？」

「この文月学園に？」

「ほう……学校か」

「いいのかよ？」

「ああ、その代わりに明日テストを受けてもらうけどな。それと、この双子は近くの小学校を紹介するよ。家は……不動の住んでいるマンションの部屋で構わないね？」

「学園長……何から何まですまない」

「良いさ。それじゃあ、これで解散するよ！」

こうしてアキ達のこれからの措置が決まった。

早速遊星がアキ達をマンションの一室に案内し、今日から六人で住むことになった。

遊星一人では少し広すぎたので、六人でちょうどよかった。

その夜、編入試験に備えて遊星がアキとジャックとクロウにみっちり勉強を教えた。

アキはネオ童実野シティのデュエルアカデミアで首席なので特に問題はなかったが、勉強をしたことないジャックとクロウを教えるのは特に大変だった。

翌日、文月学園で編入試験を受け、すぐに結果が出された。

一番優秀なアキは、

現代国語：A

古典：B

数学：A

物理：A

化学：B

日本史：B

世界史：C

英語W：A

保健体育：B

不安要素その一のジャックは、

現代国語：A

古典：E

数学：B

物理：B

化学：E

日本史：D

世界史：F

英語W：A

保健体育：D

不安要素その二のクロウは、

現代国語：A

古典：F

数学：B

物理：D

化学：E

日本史：B

世界史：F

英語W：A

保健体育：D

アキはともかく、ジャックとクロウは平均してもDクラスの实力であるが、三人共遊星と同じFクラスの配属を望み、翌日からFクラスに編入することになった。

そして、アキとジャックとクロウの文月学園編入初日が訪れたが、

文月学園に行く前に龍亞と龍可を小学校に送る。

「龍亞、龍可。学校、頑張れよ」

「うん、みんな。行ってきまーす！」

「行ってきますす！」

龍亞と龍可は元気よく小学校の校舎へ走り、遊星達も文月学園へ向かう。

文月学園の校舎の玄関には鉄人が立って生徒達に挨拶をしていた。

「おはよう、西村先生」

「む？ おお、おはよう。不動」

遊星はいつものように挨拶をする。

「おはようございます。西村先生」

「うむ。おはよう、十六夜」

アキの礼儀正しい挨拶に鉄人は満足そうに頷く。

「グッドモーニングだ、西村教官」

「アトラス……まあ、良いだろう」

一応挨拶と名字を言っているので、ジャックの挨拶を良しとする。

しかし、

「おっす、西村のとっつあん」

「ホーガン！ 誰が西村のとっつあんだ！？」

クロウにまさかの『とっつあん』呼ばわりに西村もツツコミを入れた。

「じゃあ、鉄人のとっつあんの方が良かったか？」

「なお悪いわ！！」

「んじゃ、行こうぜ」

「待たんか、ホーガン！！」

その後、何故か巻き込まれた遊星達は朝のホームルーム鉄人と追いかけてくをするのだった。

そして、新しい設備となったFクラスで新しい仲間となるアキ達を

Fクラスの野郎共が騒ぎ出した。

「えっ？ えっ？」

何が何だかわからないアキは呆然しながら慌てる。

「十六夜さん、僕と付き合ってください！」

「バカ野郎！ 何抜け駆けしているんだ！ 俺と結婚してください
！！」

中には愛の告白する野郎まで出てきた。

だが、アキは心を正常にし、にっこりしながら答える。

「ごめんなさい。私は遊星と付き合っているから、あなた達には応えられないわ」

「「「何イイイイイイイイイイイイ!?!?」」

「「「そ、そんなバカナアアアアアア!?!?」」

「「「おのれ、不動オオオオオオオオ!!!」」

Fクラスの野郎共は黒装束の衣装を纏い、FFF団となり、殺意を込めた目で遊星を睨みつける。

それに便乗するかのように雄二が呟く。

「明久が最近姫路と付き合い始めたぞ」

「「「何だと!? 吉井イイイイイイイイイイ!!!」」

睨みが明久まで届く。

「ゆ、雄二! 君は何てことをいうんだ!」

「今すぐに吉井と不動をFFF団の名の下に処刑しろ!」

FFF団会長の須川が命じ、FFF団が一気に襲ってくる。

「遊星、早く逃げないと!」

「いや……ここで迎撃する」

「たった二人で!」

「二人じゃ……ない!!」

バキッ！ ドカツ！ ボキン!!

「何イ?!?!?」

「遊星。何が何だかよくわからんが、俺達二人もこの乱闘に参加させてもらうぞ!!」

「ははっ、懐かしいな。チームサティスアクション以来の乱闘だなこりゃあ!!」

ジャックとクロウが遊星と明久側につき、FFF団を殴り、蹴り飛ばした。

遊星はフツと笑みを浮かべると、制服の上着を脱ぎ捨て、ネクタイを緩めた。

「行くぞ……ジャック！ クロウ！！ 明久!!!」

「ふん！ この俺様の前に跪くがいい!!」

「悪いな、お前らのライフをゼロにしてやるぜ!!」

「ああ、こうなったらもう、ヤケクソだああああああっ!!」

遊星・ジャック・クロウ・明久の四人 VS 異端審問会FFF団の大乱闘の火蓋がここに切って落とされた。

端から見たらFFF団が勝つように見えるが、伊達にサテライト

ですつと生きてきて青春時代を暴れまくった遊星、ジャック、クロウの戦闘能力は非常に高い。

そして、バカだが明久も戦闘能力が高い。

結果、FFF団全員戦闘不能になり、遊星達の勝利となった。

そして、Fクラスにジャックとクロウが加わった事によって後に新たな伝説を作ることになる。

明久・雄二・秀吉・ムツツリー二の四人と、遊星・ジャック・クロウの三人を含めた七人をひとまとめにしてこう呼ばれた。

『Fクラスの七星』
セブンスター

この異名が文月学園に広がる事となる……。

第16問 清涼祭準備（前書き）

とりあえずスタートしました、清涼祭編。

何故か書くのが難しく、上手にかけませんでした。

第16問 清涼祭準備

試召戦争から数週間後、文月学園の最初の行事である清涼祭が始まる。

清涼祭とは、文月学園の学園祭で、試験召喚システムを取り入れているため、注目度が高いので毎年多くの来賓が訪れる。

そのため、生徒達も自分のクラスの出し物をより良くするために準備に精を出している。

しかし、Fクラスでは……。

「プレイボール……！」

審判の秀吉の声と共に野球を始めていた。

「さあ、来い。ジャック!!」

「ふん！ このジャック・アトラスのキングストレートを見せてやる!!」

バッターボックスに立っているのは須川で、ピッチャーはジャックである。

「ねえ、遊星、クロウ。学園祭の準備をしなきゃいけないんじゃないの？」

「無理、だな……。クラスの男子ほとんどあんな調子だからな」

「つたくよ。せつかくの学園祭なのによ……」

明久と遊星とクロウはため息をついて野球を眺めている。

「貴様等！ 何をさぼっているかああああ!!」
そこにFクラスの担任の鉄人が登場する。

「あ、鉄人先生だ」

「来てくれたか、西村先生」

「鉄人のとつつあんが来てくれれば何とかなるな」

「吉井、ホーガン。後で補習だ！」

「お断りします。鉄人先生（とつつあん）」

そんな漫才を終えると、鉄人は雄二達を睨みつける。

「全員教室に戻れ。学園祭の出し物が決まってないのはFクラスだけだぞ！！」

「へえ〜い」

鉄人の一喝により、野球をしていたFクラスは全員教室に戻る。

「それじゃあ、俺が議事進行をやるから、遊星は板書を頼む」

「わかった」

Fクラスでは雄二と遊星を中心に出し物の意見を出し合う。

「……………写真館」

「何を出すつもりなんだ……………？」

「一応意見だ。遊星、書いてくれ」

遊星は一つ頷き、チョークで黒板に候補を書く。

【候補？ 写真館】

次に姫路が意見を出す。

「えっと、ウエディング喫茶なんてどうですか？ メイド喫茶みたいにウエイトレスがウエディングドレスを着るんです」

「結婚は人生の墓場……」

ムツツリーニが何故かそんなことを言う。

（康太、何があった？

遊星は黙々と黒板に書いていく。

【候補？ ウエディング喫茶】

最後に美波が意見を出す。

「中華喫茶ってのはどう？ 他のクラスとは変えて飲茶を出すの。中華ほど奥の深いジャンルは無いつて言うしね。最近はヨーロッパ文化に押され気味だけど」

（中華喫茶……そう言えば、中華料理は食べたことがないな）

そんなことを考えながら遊星はチヨークを動かす。

【候補？ 中華喫茶】

ちなみに、Fクラスでまともなアキ達は……。

「ねえ、二人は何か意見ないの？」

「そんなのほとんど学校に行ったことがない俺が知る訳ないだろ」

「右に同じだ」

「私も学園祭は初めてだからわからないわ。学校も四分の三以上は行かなかつたし」

三人共、知識や経験がないために意見が出ない。

そして、三つの候補からの集計結果、Fクラスは中華喫茶をやるこ

ととなった。

出し物が無事に決まり、Fクラスは早速準備をしていた。

「いっぱいお客が来てくれるといいね」

明久が看板を作りながら言うと、瑞希が不安な表情をしながら見つめてくる。

「明久君……話したいことが……」

「え？ どうしたの？」

「実は……私、転校するかもしれないんです」

それは明久と瑞希にとってあまりにも酷な物だった。

「……………はい？」

（瑞希が転校？ そんな馬鹿な。折角恋人同士になって、いよいよこれからって時に転校しちゃうなんて。まだ楽しい思い出も作っていないし、憧れの膝枕も耳掃除も、あんなことやこんなこともしてな

い。だいたい、彼女が転校しちゃったらこのクラスはどうなるんだ！？ 唯一の清涼剤である彼女がいなくなれば、クラスは荒廃し、暴力と略奪の跋扈する地獄になるだろう。そして全員の髪型が某世紀末救世主の脇役のようにモヒカンになること間違いなしだ。そして、唯一のヒロインである秀吉を巡って血で血を洗うような抗争が続く日々に

不測の事態に明久の頭から湯気が出てオーバーヒートし、処理落ちが発生してしまう。

「明久君!？」

「はっ!？ 僕は一体何を……それよりも瑞希。転校って本当!？」

「は、はい……お父さんがFクラスなんかより普通の高校に転校した方が良いつて言われて……」

瑞希の言葉に明久の心が燃え上がった。

「瑞希、ちよつと席を外すね。大丈夫。瑞希を転校なんかさせないから! 雄二、遊星! 知恵を貸して!!」

明久は雄二と遊星を呼んで瑞希の転校を阻止するための知恵を借りる。

「そう言うことなら……明久、学園長のところに行くぞ」

「なるほどな。学園長の力を少し借りるしかないな」

「よし、待ってる! ババア長!!」

音速に近いスピードで走る明久を雄二と遊星が後を追いかける。

「明久君……」

瑞希は手を組んで祈った。

第17問 盗聴器と提案と学園存続の危機？（前書き）

清涼祭アンケート。

【第一問】

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『明久君とクラスメイトの思い出』

吉井明久の答え

『瑞希との思い出』

教師のコメント

そう言えば二人は付き合っているのではたね。

大切な人との思い出は宝物ですから是非たくさんの思い出を作ってください。

土屋康太の答え

『Hな本（x） 成人向けの写真集』

教師のコメント

取り消した意味があるのででしょうか。

不動遊星、十六夜アキ、ジャック・アトラス、クロウ・ホーガンの
答え

『仲間との大切な思い出』

教師のコメント

四人共同し答えで少し驚きました。

仲間との思い出作りをこの清涼祭でたくさん作ってください。

第17問 盗聴器と提案と学園存続の危機？

学園長室に向かっている明久と遊星は瑞希の転校を防ぐための案を雄二から話を聞いている。

「一つ目は老朽化した教室。二つ目はレベルの低いクラスメイト。健康に害のある学習環境と姫路の成長を促す学習環境を何とかしなきゃ姫路の転校は免れないな」

「なるほど、一つ目は学園長に頼むしかないな。教育機関が生徒の健康を害する環境をほっとくわけにはいかないからな」

「でも二つ目はどうするの？ 瑞希や遊星達はともかく、僕達Fクラスのみんなはバカなんだよ？」

「それに関しては召喚大会で優勝するしかないな」

「召喚大会？」

明久は目をぱちくりとさせて首を傾げ、遊星が説明する。

「清涼祭で行われるトーナメント式の召喚獣の戦いだ。二年三年合同で行われ、どれも強敵揃いが予想される」

「その召喚大会で姫路の親御さんに俺達Fクラスが優勝する姿を見せれば、嫌でもFクラスのレベルがそこそ高いと判断して貰えるだろ。そこで、召喚大会には明久と遊星に出してもらおう。召喚獣の扱いになれてる明久と数多の特殊な召喚獣を使う遊星がいるなら何とかなるだろ」

「うん、わかった!」

「任せろ」

話をしている間に学園長室に到着する。

『……商品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

すると、学園長室で何か話し声が聞こえる。

しかし、明久はそんな事を気にせず、ドアをノックしてずんずん入った。

「失礼しまーす!」

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか?」

カヲルと話していたのは教頭の竹原先生である。

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけではないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

「さつきから言っているように隠し事なんてないね。アンタの見当違いだよ」

「そうですね。そこまで否定されるならこの場はそついでにしておきましょう」

そう告げると、竹原先生は部屋の隅に一瞬視線を送る。

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

竹原先生は学園長室を出て行く。

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい」

「学園長、実は」

明久が早速用件を言おうとするが、遊星が手で口を押さえた。

「むう（遊星）？」

「明久、ちょっと待て」

遊星は部屋の隅に行き、ゆっくりとそこにある物を退けると、そこには小さな機械があった。

（盗聴器だな……）

D・ホイールだけではなく盗聴器や発信機を作れる遊星はすぐに気付いた。

携帯電話を取り出し、文字を打ち込んで明久達に見せる。

『盗聴器がある。どこか別の場所で話そう』

「えっ!？」

「……ガキども、ちよつとこつちに来な。運んでほしい物があるからな」

カヲルは遊星達を連れて学園長室から出て、違う部屋に連れて行った。

「学園長。一体何が起きている?」

遊星は壁により掛かってカヲルを見る。

「仕方がないねえ……遊星、アンタには負けるよ。でも、アンタ達にも協力してもらおうよ」

カヲルはポケットから不思議な機械の腕輪を取り出した。

「これは召喚獣操作や試召戦争に大きな影響を与える腕輪だよ。まあ、この腕輪は試作機だけだね」

「その腕輪が何かあるんですか?」

「実はね、今度の清涼祭の召喚大会でこれの完成品である『白金の腕輪』が優勝賞品なんだよ」

「まさか……その白金の腕輪に問題があるのですか？」

雄二の鋭い指摘にカヲルは苦笑を浮かべる。

「その通りさ。まだ未完成の新技术を使っているから欠陥が出ちま
つて、使用者の得点が高いと暴走しちまうのさ」

「どうしてそんな腕輪を作ったんだ？」

遊星の疑問にカヲルは不気味な笑みを浮かべた。

「何言っただよ。不動遊星、アンタの所為だよ」

「俺の……？」

「アンタの規格外の召喚獣の力を実現してみたくなったのさ。召喚
獣の二体同時召喚と、召喚獣をどこでもだせる力を……」

召喚獣システムの開発者であるカヲルは不思議な力を持つ遊星の召
喚獣を実現しなくなったのだ。

それを聞いた雄二は小さく笑った。

「学園長、一つ相談があります」

「何だね？」

「その腕輪は点数の低い人間じゃないと使えないんですよ？ そ
れも召喚大会の優勝賞品。だったら、ここにいる明久と遊星の二人
で召喚大会に出場して優勝し、その腕輪を明久に使わせたらどうで

すか？」

「確かにそうしてくれたら私にとっても嬉しいね……それで、アンタらは私に何を求めるんだい？」

雄二の提案にカヲルは頷くが、すぐに険しい表情をする。

「簡単な話です。老朽化したFクラスの教室を改修して欲しいのです。Fクラスの設備は先日の試召戦争で上がりましたが、教室はとても酷い状況です。このままだと健康に害を及ぼす生徒が出る可能性が高いと思われます」

「なるほどね……わかったよ。その要求を飲んでやるよ。ただし、召喚大会に優勝出来たらだよ」

「ありがとうございます」

雄二は軽く頭を下げる。

すると、明久は首を傾げて尋ねる。

「あの……学園長。その腕輪と盗聴器と、どんな関係があるんですか？」

「教頭の竹原はこの私の失脚を狙っているのさ。腕輪の暴走と言う学園の醜聞をさらしてな。下手をしたらこの文月学園が潰れるかもしれないんだよ」

文月学園は試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非がとわれている。

そんな状態で暴走という問題が起きたら学園そのものの存在意義も問われることになる。

「責任重大だな……明久、どうする？」

雄二が横目で明久を見る。

「僕は……やるよ！ この召喚大会が学園を救うだけじゃなくて、瑞希を転校から守ることに繋がるんだ。だったら迷う余裕なんてないよ！」

「遊星はどうする？」

「俺もやる。みんなの……仲間のいるこの文月学園を潰させたりはしない。誰一人も仲間を失いたくないからな」

明久と遊星の答えを聞いた雄二はニツと笑う。

「だそうですよ、学園長」

「そうかい。それじゃあ頼むよ、ガキども」

「……はい！」「」

話し合いはその場で解散し、遊星達は教室に戻った。

ちなみに盗聴器は竹原に気付かれなかったためにそのままにしておく。遊星からカラルにアドバイスしておいた。

.

第17問 盗聴器と提案と学園存続の危機？（後書き）

アンケートの結果が固まって来たので仮面ライダー S t r i k
e r s で決定ですね。

少しずつですが、今第1話を書いています。

10月1日の午前0時に投稿予定です。

第18問 開催と召喚大会と最強タッグ？（前書き）

そろそろISの方も話の流れが纏まったので、この三連休中に書きたいと思います。

第18問 開催と召喚大会と最強タッグ？

清涼祭初日。

Fクラスの教室は小汚い様相を一新して中華風の喫茶に姿を変えていた。

ウェイターである女子三人はムツツリーニお手製のチャイナドレスを着ていた。

アキは赤色のチャイナドレス、瑞希は桃色のチャイナドレス、美波は青色のチャイナドレスである。

遊星と明久は恋人の素敵なチャイナドレス姿に鼻血を出して悶えていた。

「チャイナドレス、まさかこれほどの衝撃があったとは……アキ、可愛すぎる……」

「もう僕は瑞希無しじゃ生きていけない……」

「遊星……いつからお前はそんな変態になった？」

「まあ、良いんじゃないか？ 幸せそうで」

ライバルのジャックとは呆れ果て、クロウは別に気にすることなく笑っていた。

ちなみに、男性陣のウェイターは中国のカンフー映画でよく見かけ

る『^{クンフイ}功夫服』を身につけている。

そして、この功夫服に感動しているのが秀吉である。

「やったのじゃ……遂にワシも男らしい服を着られたのじゃ……」

ムツツリーニは秀吉用のチャイナドレスを作ったが、美波が秀吉に功夫服を着させるようにみんなを説得（脅）した。

「良かったわね、木下」

「ありがとうなのじゃ、島田！」

「その代わり、清涼祭でウチと一緒に回って何か奢って貰うわよ」

「お安いご用なのじゃ！」

そして、召喚大会の時間が迫り、遊星と明久が中華喫茶を抜ける。

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージで召喚大会が催される。

「一回戦の相手は君たちか……」

遊星は対戦相手の二人に思わず苦笑いをしてしまう。

その二人は二年Bクラスの岩下律子と菊入真由美。

先日の試召戦争で遊星が瑞希とタッグを組んだときに始めに戦った相手である。

「き、鬼神の不動明王！？ またあなたと戦うの！？」

「律子、落ち着いて。不動遊星の相棒は文月最強のバカよ。実質一人だから私達の最強チームワークで勝つわよ！」

二人は明久を相手にしていなかった。

「だそうだぞ、明久」

「失礼だな。負けたけど、僕のAクラス戦を知らないみたいだね」

「明久、お前の力を見せてやれ」

「了解。だけど、まだジャンク・シンクロンは使わないからね。切り札はここぞという時に使うのが基本だからね」

「わかった。それじゃあ召喚するか」

対戦する四人はそれぞれのポーズを決めて召喚する。

「「「試獣召喚！」」」

「試獣^{サモン}召喚！ 轟け、ターボ・ウォリアー！！」

遊星が召喚したのは赤いトラックが人型に変形したようなロボットのような召喚獣だった。

『Fクラス 不動遊星&吉井明久 VS Bクラス 岩下律子&菊入真由美

数学 487点&126点 VS 179点&163点』

「「う、嘘お！？」」

律子と真由美は遊星と明久の点数に驚いていた。

「今回優勝するためにいつも以上に頑張ったからな。明久もなかなかの点数じゃないか」

「文月トップクラスの瑞希や遊星、それにアキさんに勉強を教えて貰ったからこれくらい取らなきゃね」

「そうだな。さて……」

「Fクラス……いや、文月学園最強タッグの初お披露目と行きますか！！」

明久の言うとおりである。

明久は観察処分者で他の生徒より数段召喚獣の扱いに長けていて、最近はずいぶん成績が上がっており、しかも、遊星からジャンク・シンクロンを預かり、切り札の同調試獣召喚を持っている。

遊星は数多の特殊な能力を備えた召喚獣を持ち、理数系では最早文月学園の生徒や教師を超えた実力を持っている。

そして、何より……。

「状況に応じてお互いの相手を代え、隙を見せたらすかさず攻撃だ」

「オーケー！ スピードの速い僕の召喚獣ならお手のものだよ！」

息のあったチームワークで召喚獣の力を何倍にも高めている。

遊星は真由美、明久は律子の相手をする。

律子は早く明久の召喚獣を倒し、真由美と二人掛かりで遊星と戦うために召喚獣で猛攻を仕掛ける。

だが、明久は召喚獣を巧みに操り、ひらりと猛攻を回避し続ける。

「そろそろ……行くよ！」

明久は瞬時に回避から攻撃に移り、操作になれていない隙だらけの召喚獣を獲物の木刀で打ち上げる。

「遊星！！！」

「ターボ・ウォリアー、アクセル・スラッシュュ!!!」

ターボ・ウォリアーは攻撃対象を真由美の召喚獣から律子の召喚獣に向ける。

《お嬢さん、これは勝負です。本気で行かせてもらいます!》

ターボ・ウォリアーの五指の巨大な爪に赤色の閃光を纏い、律子の召喚獣を貫いた。

「いやあああああつ!」

「律子っ!?!」

「ターボ・ウォリアーの特殊能力、敵軍の召喚獣一体が戦死したとき他の召喚獣一体の点数を半分にすることが出来る。ハイレート・パワー!」

ターボ・ウォリアーから光線が放たれ、真由美の召喚獣に直撃する。

『Bクラス 菊入真由美
数学 128点 64点』

「ええーっ!?!」

「ただし、この能力を使うとしばらくターボ・ウォリアーは動けない」

ターボ・ウォリアーは機能を停止したようにガクツと止まる。

「っ！ チャンスよ！」

真由美の召喚獣は無防備なターボ・ウォリアーを狙うが、一番大切な事を忘れていた。

《最後はお願いします》

「明久、決めろ」

「へっ？」

真由美が気付いたときには明久の召喚獣の一撃でぶっ飛ばされて召喚フィールドの壁に激突していた。

「やれやれ、僕の存在を忘れちゃダメじゃないか」

大打撃を受けたことにより、召喚獣の点数が零となる。

「勝者、不動・吉井ペア！」

木内先生が勝者の名を告げ、遊星と明久はパンツとハイタッチをする。

「まずは一勝だな、明久」

「そうだね」

ターボ・ウォリアーと明久の召喚獣も同様にハイタッチをして絆を深めた。

第18問 開催と召喚大会と最強タッグ？（後書き）

遊星と明久強すぎワロタ（笑）

今日発売のタッグフォース6を買ったらこんな感じになりました。

特典のソニック・ウォリアー1枚をジャンクデッキに入れたらジャンク・ウォリアーの攻撃力が六千に跳ね上がってビックリしました。

第19問 常夏とフルボッコと悲劇(笑)(前書き)

【第二問】

以下の問いに答えなさい

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

十六夜アキの答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

不動遊星の答え

『オシリスの天空竜 オベリスクの巨神兵 ラーの翼神竜』

ジャック・アトラスの答え

『神炎皇ウリア 降雷皇ハモン 幻魔皇ラビエル』

クロウ・ホーガンの答え

『極神皇トール 極神皇ロキ 極神聖帝オーディン』

教師のコメント

君達は一体バルト三国と何を勘違いしたのでしょうか？
どうみても架空の動物や神様にしか見えませんが。

第19問 常夏とフルボッコと悲劇（笑）

召喚大会で無事に勝ち星を上げた遊星と明久は急いでFクラスに戻って中華喫茶の手伝いをする。

「「ただいま」」

「お帰りなさい、遊星」

「お疲れ様です、明久君」

Fクラスの中華喫茶に入ると、アキと瑞希がお出迎えをする。

「ただいま、アキ」

「ちゃんと一回戦を勝ってきたよ」

勝利報告をすると、店にずっといると思われた雄二とジャックが欠伸をしながら廊下から入ってきた。

「おう、明久と遊星。ちゃんと勝ってきたか？」

「ふん、負けたら承知しないからな」

遊星と明久は不敵な笑みを浮かべながらグッドサインを向け、雄二とジャックは満足したように頷いた。

「おっ、そうだ。みんな、常夏コンビはボコボコにしてやったからもう来ないと思うぞ」

「常夏コンビ?」

事情の知らない遊星と明久は目を丸くする。

「三年生の先輩で柄の悪い奴らじゃ」

「何の恨みか知らないけど、店に営業妨害してきたのよ」

秀吉と美波が話に混ざる。

「……そこで雄二とジャックに排除を頼んだ」

例により音もなくムツツリーニが現れ、雄二とジャックの回想が始まる。

「マジできつたねえな！ これで食い物扱っていいのかよ！」

現段階でどうしても改善できないFクラスの教室のボロボロさに、営業妨害の罵声を上げる客に雄二とジャックはため息をついてゆっくり向かう。

「まったく、責任者はいないのか！ このクラスの代表ゴペツ！」

「夏川！？」

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点がございましたか？」

ホテルのウェイターのように恭しく頭を下げる雄二。

話しかける前に相手を殴り飛ばしていなければ模範的な責任者である。

「不満も何もあるか！ 夏川に何するんだ！」

「ダチなら、どうして罵声を止めようとしなかった？」

身長の高いジャックが夏川と常村をギロリと見下ろす。

「う、うるせえ！ こつなったら営業できなくしてやる！」

「覚悟しな！ 先輩に逆らうとどうなるか教えてやる！」

夏川と常村（以後常夏コンビ）は中華喫茶を潰そうとするが、相手が非常に悪かった。

「ジャック」

「任せろ」

ガシッ！

「「っつてな感じだ」」

回想を話し終えた雄二とジャックはスッキリした表情をし、遊星達は当然苦笑いをする。

瑞希とアキは時計を見ると、少し驚いた表情をする。

「あ、すみません。そろそろ私達の出番なので召喚大会に行ってきます」

瑞希とアキは召喚大会のタッグを組んでおり、瑞希の父親に認めて貰うために優勝を狙っている。

「頑張つてね、瑞希」

「はい！ 頑張つてきます！」

「アキもファイトだ」

「ええ、瑞希と召喚獣のみんなと一緒にがんばるわ」

明久と遊星は瑞希とアキに声援を送り、二人は召喚大会のステージに向かった。

その後、瑞希とアキは無事に一回戦を勝ち上がり、次に二回戦が開始される。

召喚大会ステージに向かった遊星と明久は対戦相手に嫌な表情をす
る。

「お前か……」

「よ、吉井に不動！？ お前らが相手か！」

それは試召戦争で瑞希の思いを踏みにじり、遊星と明久の逆鱗に
触れて召喚獣にボコボコにされたBクラス代表の根本である。

「どうしたの、恭二。Fクラスのバカコンビが相手なんだからこの
勝負は貰ったようなものじゃない」

正面切って悪口を言うのは根本の彼女の小山である。

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めてください」

「「「^{サモン}試獣召喚！」「」」

「試獣^{サモン}召喚。出よ、『スカー・ウォリアー』！」

遊星は傷だらけの戦士、スカー・ウォリアーを召喚する。

『Fクラス 不動遊星&吉井明久 VS Bクラス 根本恭二&C
クラス 小山友香
英語W 417点&97点 VS 199点&165点』

「……遊星」

「何だ？」

「正直、この点数は申し訳ないと思っています……」

「わかっている。誰にだって得意不得意はある。そのためにスカー・ウォリアーを呼んだんだ」

「この召喚獣を？」

「ああ。だから、思いつ切りやるんだ」

「うん！」

「友香、先に点数の低い吉井を潰すぞ！」

「わかったわ！」

根本と友香は先に明久を倒そうとするが、二人の何故か召喚獣は明久の召喚獣の所には向かわず、スカー・ウォリアーの所へ一直線だった。

「スカー・ウォリアーの特殊能力、プル・マグネティックは敵召喚獣の攻撃を強制的に引き寄せること。スカー・ウォリアーを倒さない限り明久に攻撃する事は出来ない」

「な、何だと!？」

「じゃあ、まずはあんたから先に倒すわ！」

「明久」

「了解！ はあああつ!!！」

明久は自分の召喚獣に攻撃出来ない二人の召喚獣に向けて、後ろから木刀の連撃を与えて点数を減らしていく。

対する遊星はスカー・ウォリアーの腕にくくりつけた短剣で攻撃を捌いていく。

「明久、終わりにしようか」

「それじゃあ、まずは彼女さんからね」

「根本はお前に任せる。スカー・ウォリアー!!！」

《この一撃にワシの全てを込めてやりますぞ!》

友香の召喚獣の攻撃をスカー・ウォリアーは空いている左手で受け止め、短剣に全ての力を込める。

「勇敢な短剣 (ブレイブ・ダガー) ー!!」

「きゃああああ!」

短剣の一撃によって友香の召喚獣は真つ二つに切り裂かれた。

「ゆ、友香あ!?!」

「根本、君の相手は僕だ。『ジャンク・シンクロン』!」

明久の隣にジャンク・シンクロンが現れ、腰のレバーを引く。

「シンクロサモン同調試獣召喚! 『ジャンク・ソードマン』!」

ジャンク・ウォリアーの鎧と大剣を身に着けて進化した明久の召喚獣、ジャック・ソードマンは瑞希を悲しませた怒りを力に変え、大剣を構える。

「剛碎戦神剣!」

「くっ!」

根本は召喚獣の持つ二本の鎌で防御態勢をとるが、ジャック・ソードマンの大剣の攻撃力が遙かに勝り、武器ごと召喚獣を叩き潰して戦死させる。

「勝者、不動・吉井ペア！」

遊星と明久は再びパンツとハイタッチをする。

「ジャック・ソードマン、使いこなしてきたな」

「うん、もう僕の分身みたいなものだよ」

「それじゃあ、早く中華喫茶に戻ろう」

遊星と明久が中華喫茶に戻る直後、友香の前に黒い影が一瞬現れて大きな冊子を渡した。

「……………どうぞ」

黒い影は一瞬で消え、渡されたそれは、門外不出の根本恭二個人写真集『生まれ変わったワタシを見て』だった。

「……………恭二、別れましょう」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ これには事情が……………友香ああああ

あああああっ！』

「今、何か聞こえた？」

「いや、何も？」

明久と遊星はたった今一組のカップルがある組織によって別れさせられたとはもちろん知る由もなかった。

第19問 常夏とフルボッコと悲劇（笑）（後書き）

今回は葉月ちゃんと龍亞君と龍可ちゃん登場です。

そして、明久ともう一人が女装します（笑）

龍亞君じゃありませんよ？

第20問 葉月と怒号とメイド喫茶（前書き）

今日はいつもより長めです。

仮面ライダーW Strikersの続編を新連載スタートしたので、よろしかったらそちらもどうぞ。

第20問 葉月と怒号とメイド喫茶

「ただいま……っつて、何だ？」

「あんまりお客さんがいないなあ……」

中華喫茶に戻った遊星と明久はお客が全くいないことに驚く。

「あつ！ バカなお兄ちゃんだつ！」

そこに、可愛らしい小さな少女が明久を見ると尽かさずダイブした。

「えっ？ キミは誰？ 見たところ小学生だけど、僕にそんな知り合いはいないよ？」

「え？ お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……」

少女の表情が悲しみに歪む。

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！ バカなお兄ちゃんに会いたくて、龍亞君と龍可ちゃんに頼んで一生懸命に探しに来たのに！」

「龍亞と龍可！？」

遊星が少し大きな声を上げると、遊星に小さな二つの影がダイブする。

「遊星！」

「会いに来たよ、遊星！」

それは遊星の仲間であり、弟と妹みたいな存在である双子の兄妹の龍亞と龍可である。

そして、明久に抱きついている少女はとんでもない爆弾発言を口にする。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに」

「明久君！！！」

「吉井！！！」

その爆弾発言に反応したのは瑞希と美波である。

「明久君、私との関係は遊びだったんですか！？ 小学生の女の子にしか興味がないロリコンだったんですか！？」

「吉井、私の妹に何手を出しているのよ！ もう絶対に許さないわ……アンタをここで殺してあげるわ！！！」

どす黒い殺意のオーラを身に纏い、召喚獣と同じ武器である大剣とレイピアをどこから取り出す瑞希と美波。

「ちょっと待って！ 結婚の約束なんて、僕は全然」

「ふえええん！ 酷いですっ！ ファーストキスもあげたのにーっ！！！」

「吉井君、そんな悪いことをする口はこの口ですか!？」

「殺すだけじゃ物足りないわ。拷問道具で極限まで痛めつけてやるわ!！」

「ひいつ!? 僕の命が儂く散ってしまっよ!」

明久を中心にカオスと化した教室。

事態を収拾するのが困難となってきた。

「止めなさあああああーっ!!!!!」

教室に怒号と衝撃波が響き渡り、明久達はピタッと止まる。

その怒号の主は怒りのオーラをゆらゆらと体から溢れ出すアキだった。

あまりの恐ろしさに遊星達はガタガタと震えて教室外に退避していた。

「……あなた達、そこに座りなさい。良いわね?」

「……は、はいつ!!」「……」

明久達は床に正座し、色々な誤解を解くために話し合いをするのだった。

話を纏めると、少女の名前は島田葉月。

美波の妹で明久とは一年前に面識があった。

葉月が美波にプレゼントをあげる時に明久が協力していたらしく、それがきっかけで葉月は明久に好意を抱き、一方的な結婚の約束をし、ほっぺにキスをしたのだった。

そして、今日は明久に会うために文月学園に訪れ、転校してすぐに仲良くなった龍亞と龍可と一緒に明久を探すのを手伝ってもらったのだった。

「なるほどね、話はわかったわ。これで誤解が解かれたわけだから、瑞希と美波はその危ない武器を仕舞いなさい」

「……はい……」

すっかり怒りが収まったアキだが、未だに怖くて返事しかできない瑞希と美波だった。

それからようやく正座から解放された明久達。

明久はすぐに遊星の元に行く。

「遊星……アキさんってあんなに怖かったんだね」

「……ああなつたアキは誰にも止められない。今回は怪我人がいなくて良かったよ」

「アキさんを怒らせない方が身のためだね……」

明久は新たな教訓を得て大きく息を吐くと、雄二がポンと肩を叩いて言う。

「明久。言い忘れていたが、報告することがある。常夏コンビが変な噂を言っただけで営業を妨害してやがる」

「えっ？ 本当に？」

「ああ、チビっ子達の確かな情報だ。今からシバき倒しに行く」

「了解。で、その常夏コンビはどこにいるの？」

「それは今からチビっ子達に聞く」

場所を聞く前に先ほどのカオスが始まってしまったのだ。

「えつとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店で……」

「名前は、メイド喫茶『ご主人様とお呼び』だったけ？」

「確かクラスは二年」

「よし、行くぞ明久！ 我がクラスの成功のために、（低いアング
ルから）綿密に調査にしないと！」

「えっ、ちよっ、雄二？ ぼ、僕は別 　　iiiiiiiiiiii
?!?!?」

最後の龍可の言葉を言い終わる前に雄二は明久を拉致してその店ま
で疾走する。

「明久、ここはやめよう」

「ここまで僕を引っ張って何を言っているの？」

「頼む！ ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

そこは二年Aクラスだった。

「なるほど、このクラスだったか」

雄二が妙な抵抗をしているうちに、遊星とアキ、龍亞と龍可、瑞希
と美波、そして葉月が追いついてきた。

ガシッ！

翔子は雄二の頭を鷲掴みして力加える。

「いたたたたたたつ！ 俺の頭蓋骨があああああ！！」

若干のトラブルがあったが、遊星の制止により何とか収まり、翔子の案内で席につく。

そして、メイド喫茶の中央付近の席に目的の奴らがいた。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さっきいった二・Fの中華喫茶は酷かったからな！』

常夏コンビがわざわざ大声で叫びあう。

「翔子、あの連中がここに来たのは初めてか？」

「……さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変わらない。ずっと同じことを言っている」

雄二の問いに翔子は少し顔を歪めて答えた。

「よし、雄二。あの二人を喫茶店から追い出して息の根を止める。そしてコンクリに詰めて東京湾に捨てよう」

「明久、ダメよそれじゃ。ここは私達の鬱憤を晴らすためにあの二人を極限まで拷問してからにすべきよ」

明久とアキが危ない発言をして常夏コンビを抹殺しようとしており、遊星は頭痛で頭を抑える。

「……雄二、策はあるか？」

「ああ、俺に任せてくれ。翔子。間違えないように言っが、予備のメイド服を二つ貸してくれ」

「……今、持ってくる」

そう言って翔子は予備のメイド服を抱えて戻ってきた。

「……雄二、これ」

「おう。すまないな」

「……貸し二つ」

「だ、そうだ。明久、不動」

「わかったよ。御礼に今度雄二を一日自由にしていよ」

「二つちは雄二の写真を十枚ほど」

「……ありがとう。吉井と不動は良い人」

「ちょっと待て！ どうして俺が！？」

雄二の必死の弁明も虚しく、翔子は嬉しそうにその場を離れる。

「それで雄二兄ちゃん、そのメイド服をどうするの？」

「アキさんか瑞希さんか美波さんが着るの？」

龍亞と龍可が同時に首を傾げて尋ねる。

「いや、違つぞ。これを着るのは……明久と遊星だ」

恨みがましく明久と遊星を見る雄二。

「何……だと？」

明久と遊星は同時に絶望に追いつめられたの表情をする。

「雄二、何故だ！ どうして僕がメイド服なんかを着なければなら
ないんだ！？」

「女に常夏コンビを戦わせるわけにはいかないだろ。だから、お前
たち二人がやれ！」

「くっ……！」

明久と遊星は逃げようとするが、瑞希とアキに腕を掴まれる。

「明久君、着てください……」

「あう！？」

可愛らしく明久に上目遣いでじっと見つめてくる瑞希に明久は断れ

なくなる。

「わかったよ、僕はやるよ！」

まずは明久が落ちた。

「遊星、お願いだから着て」

「断る」

アキがお願いするが、真の男であり、不屈の精神を持つ遊星はもちろん即答で拒否する。

(むー、やっぱりそう簡単にはいかないわね。しょうがないな……)

「遊星……」

アキは遊星の耳元で優しく囁く。

「後で何でも言うつことを聞いてあげるから」

「何、でも……?」

遊星はピクツと固まり、不屈の精神が大きく揺らぐ。

「……仕方ない。みんなの為にやる」

そして、遊星も落ちてしまった。

「よし、それじゃあ作戦の説明と着付けだな。女性の皆さん、頼む」

ぜ」

遊星と明久は女性陣に引きずられて空き教室に向かう。

「明久君、とつても可愛くしてあげますよ」

「マーカーをちゃんと消して絶世の美少女にしてあげるわ」

「あ、木下も呼ぶね。演劇部だからメイクは得意なはずだから」

「不安だ……」

「……遊星と明久さん、大丈夫かな？」

「うーん、どうだろうね？」

メイド喫茶でケーキと紅茶を食べながら遊星と明久を見守る龍可と龍亞。

「そう言えば、龍亞って女装したことあるよね？　ねえ、もう一回女装してみる？」

「あれは龍可の代わりにフォーチュンカップに出るためだから、もう着ないよ」

「ふーん、君が女装ね……」

「ん？」「ん」

龍亞と龍可が振り向くとそこに優子がいた。

「秀吉兄ちゃん……?」

「秀吉さん……? でも、雰囲気……」

「私は木下優子。その秀吉の双子の姉よ」

優子は怪しい笑みを浮かべた。

第20問 葉月と怒号とメイド喫茶（後書き）

次回、遊星と明久と龍亞が女装します（笑）

第21問 メイド服と女装とヤンデレ彼女(前書き)

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？可愛らしさ ？統率力 ？行動力 ？その他 () 】【
また、その時のリーダー候補を挙げてください』

土屋康太の答え

『【？】 候補……姫路瑞希&島田美波&十六夜アキ』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希』

教師のコメント

予想できていました。

坂本雄二の答え

『【?その他 (結婚相手)】 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

木下秀吉の答え

『【?】 候補……島田美波』

教師のコメント

まともな答えで安心しました。

不動遊星&ジャック・アトラス&クロウ・ホーガンの答え

『【?、?、?】 候補……十六夜アキ』

教師のコメント

全てを兼ね備えたリーダーと言うことでしょうか。

それだけあなた達が十六夜さんを信頼していると伺えます。

第21問 メイド服と女装とヤンデレ彼女

「こ、この上ない屈辱だ……!!」

「天国の父さん、すまない……!!」

瑞希とアキ、美波と秀吉によって明久と遊星はメイドへと変身した。着付けとメイクが完璧すぎて、二人を知らない人間が見れば誰もが女性だと言っだろう。

ちなみに遊星の特徴の一つとも言える左頬のマークはアキと秀吉のメイクによって完全に消えていた。

そして、メイド服に着替えているとき、遊星はある声が頭に響いた。

『似合っているわよ、遊ちゃん』

(誰が遊ちゃんだ!? 母さん!!)

その声は紛れもなく遊星の母の声である。

「では、ワシは喫茶店に戻るぞい。存分に悪党をのしてくるが良い」

「了解……」

遊星と明久は二年Aクラスに戻り、翔子と連携を取ってクラスのウエイトレスであるかのように振る舞い、今回の悪の根源である常夏コンビに近づく。

明久はモヒカンの夏川に近づき、腰に抱きつく。

「え？　なんで俺の腰に抱きつくんだ？　まさか俺に惚れて」

「くたばれえっ！」

「くばああっ！」

そのまま見事なバックドロップ成功。

「な、夏川！」

常村が立ち上がると、遊星が拳を握りしめて体勢を低くする。

「消えなさい……この変態め……！」

「ぐばああっ！」

遊星は若干のメイドの演技を残しながらアッパーを常村の顎にクリンヒットさせる。

「こ、この人、今私の胸を触りました！」

「誰か助けてください！」

「ちょっと待て！　バックドロップとアッパーをする為に当ててきたのはそっちだし、だいたいお前は男だと　ぐぶあっ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

痴漢退治という大義名分を得て雄二が登場。

「何を見ていたんだ!? 明らかに被害者はこっちだろ!」

「黙れ! たった今、お前らはこのウエイトレス達の胸をもみしだ
いていただろうが! 俺の目は節穴ではないぞ!」

(いや。正直節穴だと思う)

今のツッコミに明久と遊星の心は一つである。

「くっ! 行くぞ夏川!」

「あ、あれ? これ、外れねえじゃねえか! 畜生! 覚えてる変
態めっ!」

いつのまにか明久が秀吉に押しつけられたブラを瞬間接着剤で夏川
の頭に付けており、二人はメイド喫茶から逃走する。

「逃がすか! ジャック、クロウ、頼むぞ!」

雄二が店の外に向かって叫ぶと、呼ばれて待機していたジャックと
クロウが悪い顔で常夏コンビを待ちかまえていた。

「いらっしや〜い」

「ひっ……ひぎゃあああっ!?!」

常夏コンビはホラー映画で化け物に遭遇した登場人物のように叫ん

で全力で逃げ、ジャックとクロウが後を追う。

「さて、明久。とつとこのメイド服を脱ぐぞ」

「うん。僕たちの心の貞操を守るためにもね」

空き教室に向かおうとした遊星と明久。

しかし、誰かがメイド服を引っ張って二人を止める。

「遊星え……」

鳴きそうな声が遊星の耳に入る。

「龍亞、か……?」

遊星が振り向いた瞬間、眼をぱちくりとさせてしまう。

目の前にいたのは、メイド服を着せられ、涙目になっていた龍亞だった。

ちなみに遊星が龍亞だとわかったのは、いつもの髪型であるポニー

遠くから聞こえる龍可と優子の声。

「よし、早く着替えよう」

「「ラジャー！」」

すぐに空き教室で遊星と明久はカンフー服に、龍亞は私服に着替える。

「そろそろ召喚大会、三回戦の時間だ。行くぞ、明久」

「オーケー！」

「ねえ、俺も一緒に行っている？ 今龍可と優子姉ちゃんに捕まったら……」

ブルブルと震える龍亞を残すわけにはいかず、遊星と明久は龍亞を連れて行く。

しかし、三回戦は相手選手が食中毒で棄権してしまったので不戦敗で終わってしまい、仕方なくすぐに中華喫茶に戻る。

中華喫茶に戻ると、またまた新たな惨事が起きていた。

葉月がチャイナドレスを着替えようとして、近くにいたムッツリーニが鼻血の大量で死にかけている。

「は、葉月ちゃん！ こんなところで着替えちゃダメだよ！ ムッツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

明久が止めなかったら後十秒でムッツリーニが死んでいたかもしれない。

「あ、バカなお兄ちゃん。もうメイド服脱いじやったんですか？」

「あはは。お兄ちゃんにはそんな趣味はないからもう着ることはないよ！」

爽やかな笑顔で応える明久だった。

「ところで、何で葉月ちゃんがチャイナドレスを？」

「このお店の手伝いをするためです！ そしたらあのお兄ちゃんが作ってくれたです！」

「そ、そうなんだ……」

（流石だよ、ムッツリーニ……）

明久はムッツリーニの守備範囲に驚いていた。

それから召喚大会に行っていたアキと瑞希、常夏コンビをボコボコにしてきたジャックとクロウも中華喫茶に戻り、徐々にお客が増え
ていき、再び慌ただしく営業を行っている。

そんなこんなで二時間が過ぎ、召喚大会四回戦の時間が迫る。

「明久。そろそろ四回戦の時間だ」

「ん。わかった」

「バカなお兄ちゃん、葉月が応援しているから頑張るです！」

葉月が元気良く手を振って明久を応援する。

「うん、ありがとう。葉月ちゃん」

明久は笑顔で葉月の頭を撫でると、

「勝つたらご褒美に大人のキスをしてあげます！」

超弩級の爆弾が投下された。

「へっ？」

「キスだけじゃなくて、一緒にお風呂も入るです!」

更に爆弾を投下する葉月に呆然とする明久。

「葉月が疲れたお兄ちゃん、背中を流してあげます!」

「ちょ、ちょっと! 葉月ちゃん、君は何を言っているのかな!??」

「明久君……」

「吉井……」

ぼんと両肩を叩かれる明久はガクガクと震えながら振り向く。

「明久君、言い残すことはありませんか……?」

「アンタ、ウチの大切な妹に何をしてくれるのかしら?」

ヤンデレ恋人とシスコンが明久を抹殺しようとしている。

「グッバイ!!」

命の危機を察しした明久は遊星を連れて中華喫茶から脱出する。

「瑞希……次の召喚大会の相手は吉井だったわよね?」

「はい……ですから私が叩き潰してやりますよ……」

「はぁ……もう怒る気になれないわ……」

病んでる瑞希と美波にさすがのアキも疲れしてきた。

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ』
遊星と明久、アキと瑞希は前にでる。

「明久君……」

「は、はい!？」

「一撃であの世に葬ってあげますからね……」

「僕を本当に殺す気!？」

「すぐに私も死にますから……」

「ヤンデレ!?! 瑞希は本当にヤンデレに目覚めちゃったの!?!」

明久と瑞希のそれぞれのパートナーの遊星とアキは苦笑いを浮かべ、
召喚獣を召喚する。

「「試獣召喚！」」

「試獣^{サモン}召喚！ 光来せよ、『ライトニング・ウォリアー』！！」

「試獣^{サモン}召喚！ 天上界より出よ、『凜天使 クイーン・オブ・ローズ』！！」

遊星は雷をその身に纏う戦士、アキは薔薇をモチーフにした天使を召喚する。

『Fクラス 十六夜アキ&姫路瑞希

古典 416点&401点』

「ぐつ！ 流石Fクラス最強の二人！ でも僕たちも！」

『Fクラス 不動遊星&吉井明久

古典 149点&127点』

「……遊星」

「……明久」

「「申し訳ない……」」

二人の点数は決して低くないが（むしろ明久に関してはもの凄い進歩である）、アキと瑞希の点数から考えると謝罪したくなるのも無理はなかった……。

.

第21問 メイド服と女装とヤンデレ彼女（後書き）

順調にIS バカテス Wの順番で投稿できていますので、次はW
第二話です。

第22問 気持ちと仲直りと大胆（前書き）

瑞希がだんだん性格が可笑しくなっていくような（笑）

それでも明久が羨ましいよ（<|>。）

第22問 気持ちと仲直りと大胆

明久&遊星VS瑞希&アキ、それぞれの恋人同士の召喚大会は早くも決着が着きそうな勢이었다。

「明久君……大人しく私の召喚獣の一撃で逝って下さい……」

「いやああああああああっ！！ 小学生からずっと恋い焦がれてやっと想いが伝わった瑞希に殺されるうっうっうっうっうっ！！！」

明久はジャンク・ソードマンの高速機動で悪鬼と化している瑞希の召喚獣から逃げ回っている。

「遊星！ 何とかして！ このままじゃ瑞希の召喚獣の一撃を受けてフィードバックで本当にあの世行きだよ！！！」

頼りの遊星に助けを求めるが、遊星も追い込まれている。

「無理だ、明久！ こっちはアキの相手で手一杯だ！！！」

ライトニング・ウォリアーの操作に神経の全てを集中させて、アキの凜天使 クイーン・オブ・ローズの剣を捌いている。

だが、ライトニング・ウォリアーは雷電を纏う戦士であるため、拳に雷電を宿して捌く時に電撃を放って少しずつクイーン・オブ・ローズの点数を減らしている。

「だが、このままじゃこっちがやられるのも時間の問題だ！ 何か

手を打たないと……そうだ！」

遊星は通信機を耳に装着して誰かと連絡する。

「康太、頼んだぞ！」

遊星がムツツリー二に何かを頼んだ次の瞬間、瑞希の後ろを黒い影が通り過ぎると、変わったところが一つあった。

それは、瑞希の耳に通信機が取り付けられていた。

「明久、通信機で今すぐ自分の気持ちを吐き出すんだ！」

「りよ、了解！」

明久も通信機を取り付け、小さな声でマイクに向かって話す。

『え、えつと……僕は瑞希のことを小学生の頃から大好きでした。いつも可愛く笑っていて、僕にとっては女神様の微笑みみたいなものです。僕は瑞希の恋人になれて嬉しく思っています。出来ればですけど……この先、一生瑞希の側に一緒にいたいです！！』

明久は自分の気持ちを全てではないが、その一部を瑞希に届いた。

当然……。

「明久君……ふにゃあ」

瑞希は嬉しすぎて脳がオーバーヒートを起こしてしまい、嬉しそうにその場に座ってしまい、召喚獣も同様に嬉しそうな表情を浮かべ

て座る。

「流石ね遊星。瑞希の最大の弱点を正確に突くなんて！」

もはや戦闘不能になった瑞希を見て、アキは遊星の賞賛する。

「残るはアキだけだ。行くぞ、明久！」

「了解！」

ライトニング・ウォリアーとジャンク・ソードマンはアキのクイーン・オブ・ローズに狙いを定める。

「こうなったら、一気に二人を迎え撃つわ！ クイーン・オブ・ローズ！！」

《はい、姫様！》

「クイーン・オブ・ローズの特殊能力。自身の点数を半分にして、フィールド上の一番点数の低い召喚獣を破壊する！」

ちなみに、現在の点数は。

『Fクラス 不動遊星
古典 112点』

『Fクラス 吉井明久
古典 102点』

『Fクラス 十六夜アキ
古典 344点 172点』

『Fクラス 姫路瑞希（戦闘不能）
古典 381点』

「僕ですかー！ー！?!?!?」

「ローズ・ベリアル
薔薇埋葬！」

クイーン・オブ・ローズの薔薇の盾から竜巻が発生し、ジャンク・ソードマンを貫いて粉碎する。

『Fクラス 吉井明久
古典 DEAD』

「ぐはっ!?!」

明久は体中に激痛が走って倒れる。

「明久!?!」

「明久君!?!」

明久が倒れたことにより、瑞希は覚醒し、急いで明久の元に行く。

「明久君、大丈夫ですか!?! しっかりしてください!」

「ああ、瑞希…… 本当に君は女神様に見えるよ……」

「明久君…… 大好きです!」

いつの間にか元のバカップルに戻っていた明久と瑞希だった。

「勝負だ、アキ! ライトニング・ウォリアー!」

「望むところよ、遊星! クイーン・オブ・ローズ!」

雷電の戦士と薔薇の天使が全ての力を拳と剣に込めて最後の一撃を放つ。

「ライトニング・パニッシャー!」

「ローズ・トリマー薔薇剪定斬!」

一瞬の眩しすぎる閃光がフィールドを包んだ。

『Fクラス 不動遊星 VS Fクラス 十六夜アキ
古典 5点 VS DEAD』

ライティング・ウォリアーの一撃が先に決まり、クイーン・オブ・ローズは戦死する。

結果にアキは息を吐いて

「ふう……やっぱり適わないわね。私達の負けよ」

瑞希は既に戦闘不能になったのでアキは敗北を宣言する。

『勝者、不動・吉井ペア』

「何とか、勝てた……」

遊星は体の力が抜けて膝をついた。

「遊星、大丈夫？」

アキは遊星の元に行き、手を差し出す。

「ああ……もしアキが召喚獣の扱いがもう少し慣れていたら俺達が負けていた……」

「じゃあ、古典の勉強を頑張らなきゃね」

「そつだな。頼む、アキ」

「ええ、任せて」

一方、瑞希は明久と仲直りをするために屋上へ連れてった。

「明久君、ごめんなさい。私ったら、暴走しちゃって……」

「瑞希。葉月ちゃんのは気にしないでね……僕はロリコンじゃないから絶対にしないから!」

「は、はい……じゃ、じゃあ……」

突然、瑞希は顔を真っ赤にして言う。

「ん?」

「代わりに、私がしてあげましょうか?」

「……はい?」

「その……ご褒美に大人のキスと、一緒にお風呂も入るのを……」

「ま、マジで?」

「明久君が望むなら……その後も……」

「その後って……?」

瑞希は明久の耳元で小さく囁く。

明久はその後、鼻血の出血多量で保健室に運ばれた。

対する瑞希は顔を真っ赤にして中華喫茶で働くのだった。

第22問 気持ちと仲直りと大胆（後書き）

今回は翔子&優子とバトルです。

その後は原作通りの誘拐事件を予定しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2085v/>

バカと絆と決闘者

2011年10月13日13時52分発行